ベルリン・ディスカッション

——ベルリン（フムボルト）大学における ヨーロッパ・エスノロジーの十年と今後の課題——

ヴォルフガング・カシューバ／ペーター・ニーダーミュラー／
ベルント=ユルゲン・ヴァルネッケン／ギーゼラ・ヴェルツの座談会
司会：シュテファン・ベック／レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ
(2001)

Berliner Diskussion: Perspektiven Europäischer Ethnologie — Versuch einer Zwischenbilanz. Gespräch zwischen Wolfgang Kaschuba, Peter Niedermüller, Bernd Jürgen Warneken und Gisela Welz. Programmdirektoren: Stefan Beck und Leonore Scholze-Irrlitz. (2001)

河 野　　眞（訳）

Japanese translation by Shin Kono

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp

目　次

はじめに …… 90
Ⅰ．ヨーロッパ・エスノロジーのフィールドと問題性 …… 91
Ⅱ．専門分野の伝統と境界 …… 101
Ⅲ．東西ヨーロッパ間の専門分野のパースペクティヴ …… 105
Ⅳ．複合社会におけるヨーロッパ・エスノロジー：理論的・方法論的取り組み …… 113
おわりに …… 122
訳注 …… 123
解説（河野眞） …… 130

Summary

On the occasion of Wolfgang Jacobeit's 80th birthday and the approaching tenth anniversary of the Institute for European Ethnology's founding, panellists participating in the "Berlin Discussion" asked

about the further development of European Ethnology—both in Germany and specifically at the institute in Berlin.

The panellists first discussed to what extent and how European Ethnology can further develop via theoretical and methodological perspectives instead of thematic or spatial foci. In this sense, “European” would not signify a focus on the spatial field of the European continent, but rather a critical review of European ideologies, knowledge, and culture and a “post-colonial” perspective on these paradigms. In line with this purpose, many ethnological research projects at the Institute currently focus on the connection between the actions of social groups and the cultural mechanisms behind these actions. These projects employ a mode of “socio-scientific cultural research” which is related to social anthropology in the UK and to cultural anthropology in the USA.

Secondly, it was noted that there are still many differences between the theories, concepts and methods employed at various institutes for European Ethnology, and that we must address the disciplinary folklore traditions even more closely than we have thus far.

Thirdly, panellists asked themselves to what extent the field of ethnology should develop an interdisciplinary perspective, especially with respect to other social sciences. In this sense, interdisciplinary work not only involves crossing boundaries between the social and cultural sciences, but also developing actual “interdisciplinary” and “transdisciplinary” methodologies in order to further understand the connections between culture and society.

Fourth, panellists discussed how to develop an ethnological research agenda whose topics are not primarily about continuity and tradition but rather about social chance and cultural innovation. Within the cultural sphere, this dimension of change has been manifested more and more explicitly as motive force of late modernity and has been reinforced by varied phenomena of globalisation, all of which further accelerate exchanges between cultural patterns and practices.

Fifth, it was particularly emphasised that discussions about ethnological methodology and self-reflection must be put at the forefront of ethnographic analysis. This especially refers to the specific methods of ethnological fieldwork, to the researcher’s role in the field and also to the implications of the debate about “writing culture” for ethnological writing and publishing in the future.

All of the panellists agreed that the Institute in Berlin should further promote the internationalisation of European Ethnology—especially against the background of the many separations still to be overcome between Western and Eastern Europe.

はじめに

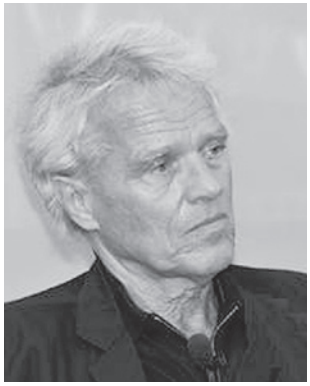
レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ（ベルリン大学 ヨーロッパ・エスノロジー研究所地域ミュージアム主任研究員）*：先ずは、この座談会のために時間をとっていただいたことにお礼を申し上げます。始めるにあたりまして、この座談会の企画はヨーロッパ・エスノロジー協会の設立10周年の節目[1)]に因むことを特に挙げたいと思います。フムボルト大学（ベルリン大学）ヨーロッパ・エスノロジーのパースペクティヴをめぐってかかる座談をひらくことができたこと自体、当研究所のよき伝統によるものです。と共に、自己省察、すなわちヨーロッパ・エスノロジーあるいは工業社会における専門的な文化研究の内容・方

* 座談参加者の最初の発言に当時の職名を付記する。今日の職名の他、年齢や経歴については解説を参照。

法・パースペクティヴの如何は、本来取り上げるべき課題でもあります。そもそも学問は、自己自身について絶えず、間断なく自省することによってのみ実現するものであると言ってもよいでしょう。学問の諸分野にも物質的所産にも、またそれらの分肢においても見られるのは、問題設定の意味が大きくなる一方という現実です。社会的諸条件とパースペクティヴ（視座）への絶えざる反省を欠いては、学術的作業はあり得ません。つまるところ、そうした考察が学知の活用と応用へつながってゆくわけです。それは、近年では医学や遺伝学において特に顕著にみとめられます。しかし文化研究（人文科学）[2]の場合でも、そうした反省や議論の重要性はたかまる一方です。またその観点からは、私たちの専門分野ではどういう課題が立てられるべきでしょうか。ヨーロッパ・エスノロジーが、現今の諸世代の自己理解に影響をあたえるだけでなく、おそらくその変化をもうながすとすれば、それはどの程度なのでしょうか。またここに着目するなら、ここで最初の問題点、すなわち私たちがこれから取り上げようとする問題点が浮上します。すなわち、ヨーロッパ・エスノロジーのフィールドと対象、それにパースペクティヴとは何かという問題点です。それは、総括的な研究プロジェクトとは何かと言い換えてもよいでしょう。

Ⅰ．ヨーロッパ・エスノロジーのフィールドと問題性

ヴォルフガング・カシューバ（ベルリン大学 ヨーロッパ・エスノロジー研究所 教授）：我々は、以前、自分たちなりの問題直視[3]に沿って多数のテーマを取り上げ、フィールドとして設定したものです。つまり対象設定なのだが、昨今、理論的にも方法論的にも、さらに展開を考えなければならない状況であることに気づかされている。今すぐ頭に浮かぶ問題複合としては、さしあたって 5 点を挙げてみたい。第一は、社会を視野において文化を問うこと、言い換えると、文化が社会的な統合観念あるいは逆に不統合観念として大きな意味をもってきている様相に、より強く関心と緊張をもって取り組むこと[4]。文化は反統合の側面でも強まっているはずなのだが、我々の専門分野の推移を見ると、常に注意が向けられたのは統合観念の側面だった。さしずめ民（フォルク）の概念[5]がそれにあたるだろう。第二に、我々の物の見方がより社会に足の着いたものとなっているか、またどうすればそうなり得るかについて、もっと議論を重ねる必要がある。少し前には、それは政治へのアプローチという言い方をしており、またフォルクスクンデ（民俗学）の自己解放などとも言っていた。第三は、この専門学のいわばストラテジーにかかわることがらなのだが、我々が立っているのは、文化研究と呼ばれる河流のどの辺りなのか。観察者なのか、自分も泳ぐのか、それも流れに沿うのか、それとも逆らうのか。コンセプトにかかわる考察を概観するなら、これまでもそうであったように中心的な機能を自分が果たすのかどうかという問題も出てくるだろう。パースペクティヴの取り方でも重点にしぼるのではなく、幅に力点


ヴォルフガング・カシューバ

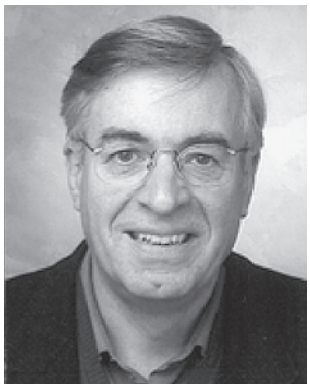
をおく観点もあり得るが、その場合、自分を見失うリスクも高まることになる。第四に、どの種類の学知の生産にかかわるかという課題も起きる。1960年代以来、批判的なフォルクスクンデ（民俗学）や自省的な文化研究をめぐって思いわずらい勝ちな者と評論家に呼ばれるようなものが頭をもたげたものだったが[6]、それでもなお発言ができるのだろうか。他者に強いてもよいだろうか、つまり、予測や仮説を提示できるだけのものがあるだろうか。第五に、ここから必然的に生じることだが、我々が生産する学知とはいかなるものであるべきか、マーケットを念頭に置くべきだろうか。またいかに振る舞うべきだろうか。今仮にだが、作業を分割してみよう。つまり、フォルクスクンデ、経験型文化研究[7]、ヨーロッパ・エスノロジー、これらの看板はそれ自体がアカデミックな形態に引きこもっているところがある。実際には修了者はマーケットへ積極的に出てゆかねばならないわけだ。以上、数点を挙げてみた。

ギーゼラ・ヴェルツ（フランクフルト大学 ヨーロッパ・エスノロジー研究所 教授）：問題点に対するお二人の問いかけについて、私なりにちょっと考えてみました。この専門分野の問題点を全体としてはどう見るべきか、ということです。この専門分野が永く問題にしてきたのは、個別事象や固有の意味合いが見過ごされ、正当な権利をみとめられず、上から枠をはめられたり押しのけられたりして、多様な社会的状況や社会的集団のなかでだいなしにされることでした。人々の伝統に沿った姿勢への関心から始まり、今、私たちが前にしているような研究分野となるまで、ずっとそうだったのです。つまり低位のマージナルな集団、たとえば移民の若者たちのような社会的に排斥あるいは邪魔者扱いされている集団の実態についてもそうなのです。その実態を正当にあつかい、文化的な実情をあきらかにすることが重要だったのです。

少し私自身の研究にもどってみますと、ストリート・ライフは、たしかにその方向をたどった研究でした。つまり、善意の社会改良のプログラムにまで批判を向けたのです。そうしたプログラムは、個別事象あるいは自己心情[8]を救いだし、あるいはそれを鼓舞することを前面に据える、すなわち、言うなれば多文化的なポリシーであったわけです。と言うことは、私たち自身も多少とも貢献したはずの文化付与を今度は解体しているのです。それは、反省的姿勢がもってしまうもう一つ側面で、社会的なコンテクストのなかに私たちの学問知識を浸透させるとそうならざるを得ないのです。これから私がもっと問題にしたいのは、以前なら文化批判的に語るだけであったと思われる場所で、社会的な振る舞いとその連関における個別事象あるいは特殊心情を問うていることです。社会的なまとまり

を探るあらゆる実作業は、そうならざるを得ないでしょう。そうした実作業、つまりマスメディアは消費やツーリズムの受容など、これらは私たちが覗いてみようとする領域です。行動における遊び幅があるかどうか、あるいはそれどころか抵抗の余地もあるかどうか？　――問題は、そうしたプロジェクトの要点として、モラル的な側面が高度に重なってくることです。社会的にある程度目立ったこれらの集団や実態を私たちの観点でもって臨むわけですから、当然にも、先ずはそうした集団に何らかの救いを差しのべることにもなります。同時に、彼らに対する私たち自身の見方を訂正したり、強化したりすることも起きてきます。のみならず、そうしたし批判的視点はまた、私たちの対象を別の仕方で組み変え、構成し直すことができればという願望ともむすびつきます。言い換えれば、日常を学問的に把握することにはじまり、後期モダン社会のなかで起きている変化の意味について問題分析をおこない、さらにグローバリゼーション時代に社会的摩擦がどのような組成をもっているかを問うことになります。その際、明らかに意識しておくべきなのは、私たちが文化を分析する社会科学にたずさわっていることです。でなければ、たちまちヒューマン・サイエンス、すなわち精神科学（人文科学）の分野へと押しもどされかねません。それは好ましくない展開であると私自身は感じています。工業社会はネオ工業社会やポスト工業社会の方向へ変化していると言ってよいでしょうけれど、それは知的生産物や知的転移が中心となる社会です。

ベルント＝ユルゲン・ヴァルネッケン（テュービンゲン大学 験型文化研究ルートヴィヒ・ウーラント研究所 教授）：文化研究以上のものと言うのは、私もそう思う。〈文化をめぐる社会科学〉にはぐっときました。と同時に、専門分野を指す言い方として一番よいのは〈ソーシャル・アンソロポロジー〉でしょうね。もっとも、イギリスではこの分野名はすでに非常に特殊な定義をもつものではなくなっていることも分かってはいるのだが ―― いずれにせよ、エスノロジーとソシオロジーの結合に自分たちの可能性を見ようと思う。それは、エスノロジーには誤った他者区分[9]の仕組み、つまり根本的に誤ったヒエラルヒーが含まれていると見ているからでもある。それに対して、社会学には支配を分析する、また支配を批判する契機があり、それがためにエスノロジーの文化相対主義を無駄話や暇つぶしに陥らせず、多種多様な集団機会や国民文化などにあって潜在的に不均等なものである個々人の行動の幅を気づかせてくれる度合いが高いことになる。


ベルント＝ユルゲン・ヴァルネッケン

しかし一つ付け加えておきたいのだが、社会学的な思考とエスノロジー的な思考の結合と言っても、この二つの学問分野の対象野をそっくり自分のものにしようして

いるわけではないことだ。我々の能力がおよぶ範囲はずっと狭いんだな。非常に問題の大きい領域であることをも改めて指摘しておくべきだろうけれど、たとえば〈フォルクスクンデ〉（民俗学）という専門分野をいわば〈プリミテゥヴに〉継承しているといったこともそうなのだ。こういう言い方自体がきわどい感じに響くかも知れないのだが、〈伝統的〉と〈モダン〉の対比、また〈プリミティヴ〉（primitiv）と〈文明化された〉（zivilisiert）という（専門分野のなかではすでに脱対比的となっている）関係への取り組みという以上ではないわけだ。これには、モダンな文化型と不（あるいは非）モダンな文化型というリアルな非同時性ないしはリアルな混合を調査すること、さらに〈非モダン＝非文明化〉と〈モダン＝文明化〉のような統合の解体も入ってくる。こうした対比では、たとえばナチズムはモダンの自己倒錯というより、主要にモダンの退行[10]とみなすことができることになる。これらの問にたいしては、我々の専門分野は、多彩な材料によってだけでなく、永い経験によって寄与することができる。モダン批判をめぐる退行的あるいは前進的なヴァリエーションを含む経験、同じく〈プリミティヴ・カルチャー〉を単純・低次・野蛮・非合理と重ね合わせて見下したり、逆に持ち上げるのもそうであり、いずれも問題をはらんでいるわけだ。

ペーター・ニーダーミュラー（ベルリン大学 ヨーロッパ・エスノロジー研究所 教授）：何よりも問うべきは、目下の専門分野である〈ヨーロッパ・エスノロジー〉が一般的なものとして存在するのかどうかという点です。それは、ヨーロッパ・エスノロジーがヨーロッパ大陸の大半では一向に知られてはいないから、だけではないのです。事実としてヨーロッパ・エスノロジーは、重層的かつ混合的な専門分野で、しかもその重層性はそれ自体がテーマとして取り上げるべきもの以上なのです。ヨーロッパ・エスノロジーはヨーロッパ各国それぞれで意味論的にもニュアンスの面でも異なったものを含んでおり、またそれぞれに〈ナショナル〉な発達史をもち、理論的にも異なった展開を遂げたと解されています。ヨーロッパ・エスノロジーのなかに、大きく異なったナショナルなモデルとナショナルな方向の分岐が見られること自体、パラドックスでアムヴィバレントな状況です。これについて議論することは必要で、さもなければ自分たちはこの専門分野を理論的に確立できないことになります。さらに、〈ヨーロッパ・エスノロジー〉の名称の下に、それらしい性格のあらゆる見解や理論、なかにはきわめて保守的でナショナリズムのものも少なくないのですが、それらが含まれることをも許容するかどうか、これは専門分野のポリシーにかかわる課題になるでしょう。それにまた、一つの専門分野に対して複数の名称があることも、この分野の長所なのかどうかを批判的に考察することがもとめられます。異なった名称が並行しておこなわれていることに、自分自身は懐疑的なのです。それにテュービンゲン大学の大会では、専門分野のアイデンティティを見出すには〈フォルクスクンデ〉の名称に立ち戻るべきとの声が挙がったこと[11]を耳にしたりしますと、懐疑はさらに強まりま

す。

この〈多様性〉は、研究プロジェクトならびに研究対象をめぐるパースペクティヴからも大きくなるばかりです。自分のかかわるこの専門分野がまるで〈よろず屋〉のように思えることもあります。何をしてもよく、任意の偶然的なテーマも選択可能だからです。よく言われるように、それが長所であるかどうかには、非常に疑問をいだいています。ヨーロッパ・エスノロジーのなかでは理論面でのテーマの選び方でも何でもありのような現実の赴くところ、人文科学と社会科学のなかでヨーロッパ・エスノロジーは分析的にも理論的にも鋭さをもたなくなっています。テーマに何らかの〈統一性〉がなければいけないとか、そうした求刑論告をしているわけではないのですが、エスノロジーの観点から分析し解釈し、またこの専門分野らしい重点をおくには、社会生活においてどのようなテーマやパースペクティヴ、またどの領域がそれにあたるのかを、もっと厳密に考察する必要があるように思えるのです。だからと言って、改めてテーマ設定において規範（カノン）[12]を措定すべきであるというわけではありません。しかし、自分たちの強みがどこにあり、どんな理論的・方法論的なパースペクティヴからテーマあるいは対象分野について実際に調査をおこなうべきかを明言できる必要があるでしょう。それは先ほどベルント=ユルゲンが詳しく述べたこととも重なります。彼の提案はたいそう興味深いものですが、しかしそれが唯一のパースペクティヴであるとも言えません。

そこで私は、これらすべてを批判的にまとめてみました。と言うのは、問題直視と課題設定も、それぞれの専門分野の実際の研究ないしは理論形成のなかでのみ表現できるからです。この辺りに、自分たちの専門分野にとって緊要のことがらがあると思います。しかしヨーロッパ・エスノロジーの問題関心ないしは課題設定を専門分野の歴史から導き出そうとするなら、特定しなければならないことがあります。つまり、ヨーロッパ・エスノロジーとは、伝統的なフォルクスクンデ（民俗学）の現代化（モデルニジーレン）ということになるでしょう。しかし何がこの現代化を特徴づけるのか、となると、ヨーロッパの研究風土のなかで、さまざまな理解や解釈がなされ、今もそれがつづいています。もう一度言っておきたいのですが、ヨーロッパ・エスノロジーとは、伝統的な研究のあり方につけた新しい〈ラベル〉にすぎないことも少なくないのです。しかしそれとは別に、従来のフォルクスクンデのラディカルな転換を図っていることもあります。ヴォルフガングがその近著[13]で表明したのが、さしずめそれにあたるでしょう。しかしそうした差異にもかかわらず、先ほど述べた現代化の試みを概観するなら、三つの中心概念にしぼることができるでしょう。つまり、フォルクスクンデの現代化のさまざまなあり方が意味するものです。それは、比較（研究）、歴史化（歴史学への志向）、人類学化[14]です。現今の研究におけるパースペクティヴは畢竟この〈発展線〉に沿っている、と思われます。これ以外の問題点の見方、たとえば社会人類学の行き方もないではないのですが、稀であり、またマージナルと見られ、しかし

それだけに自分たちの専門分野に欠けているのがそれなのかも知れません。

シュテファン・ベック（ベルリン大学 ヨーロッパ・エスノロジー研究所 研究員）：先ずキイワードの〈問題直視〉について、異論をさしはさまずにはおれないのです。研究発表大会や研究論文を読んでいるとき、僕もまた、自分たちの専門分野では、そうした理論的に導き出された問題直視において貧困であるとの感情におそわれることが多かったのです。これ自体が論題になるでしょうけれど、それはさておき、それをどう整理するかを考える必要があります。一つの可能性として、多くのエスノグラーフの眼には、研究の戦術（ストラテジー）と研究のフィールドが重点の記述化を提供していることになるでしょう。〈厚い記述〉[15]を、ここでは字義通りに受けとっておきましょう。もうひとつの説明をあたえるなら、研究者のフィールドへの関与には内在的なものがみとめられるはするが、理論的な関与とそれへの準備は省察において外材的にとどまっています。いずれにせよ、理論的に導き出されたものとしての問題直視の代わりに、この専門分野は、むしろ部分エートスによってつなぎあわせられているように思えるのです。特にマージナルな存在への感情移入などに、それがよくあらわれています。エスノグラフィーの研究の実際におけるこのエートスは、それによって重要な方向付けならびにアイデンティティの機能を果たしてはいます。しかし多くの研究においては、理論面では脆弱なパースペクティヴが目につくのですが、その赴くところ、フィールドとの取り組みが、どうしても分析よりも、ただの記録になってしまいます。つまり、収集に際して、記録して救い出すというモチベーションがいかに強いかという問題があらためて見えてくるのです。

ベルント=ユルゲン・ヴァルネッケン：その方向では、ディートリヒ・ミュールベルク[16]から学ぶところがあった。ミュールベルクは、左派のフォルクスクンデ（民俗学）の観点から下層ないしはマージナルな民衆の自己心情に共感を寄せつつも冷静な問いかけを重ねている。つまり、我々の社会づくりと社会が全体として前進するのに役立つのはいかなる種類の心情であろうか、という問いかけだが、同時に、やれ地方だと言って太鼓を叩くのであれ、やれ下層民衆を信奉するのだと笛を吹くのであれ[17]、音楽のような遊戯とともに袋小路に入り込んでしまうだろう。言いかえれば、将校のパースペクティヴを兵卒のパースペクティヴで置き換えるのではなく、両者を結合するということだ。

ヴォルフガング・カシューバ：我々の専門分野は、記述すればそれでよいというものでもないと思う。その点で、我々が発展させてきた諸々のテーマや地平やパースペクティヴは、我々がかかわっている機関組織とは部分的にしか対応していない。特に亀裂が大きくなるのは、我々がクリスマスとか人種論とかについて発言できることに通俗メディアが突然気づいたときだろう。すると、学問の分野では、またもやこう言われることになる。〈そもそも君たちがかかわってきたのは、やはりあれこれのニッチだったわけだ〉。しかしそれで収まり切らないことも多いだろう。あるいは、こう問われるかもかも知れない。こ

れは何なの、ポストモダンかそれに類したもの？実際、我々は、事態や関係の変化についてゆこうと試みてきたわけだろう。メソッドのミックス[18)]、これは過去30年のあいだに非常なテンポで起きた自己像や自己理解の変遷を背景にしている。この辺りは、他の学問分野はついてゆけないと思う。だからと言って我々が前人未到の地へ分け入ることになったかどうかは別問題なのだが。――しかし1960年代以来今日までの我々の専門分野をちょっとみれば、たしかにまったく新しいものが成立したのだった。と同時に、堅固な建物はもはや存在しないとも言える。我々は、いわば木造家屋の建材をかついで歩いているようなものだ。これを見て世間はいら立ってこうたずねる。〈君たちは、最終的には一体どこに小屋をたてるのかね〉。我々はこう言い返す。〈そうね、我々はむしろキャンプ生活者なんだろうね〉。いずれにせよ、フィールドにせよ、テーマにせよ、あるいは自己像にせよ、平面に立っている者としてこの分野を議論したくない。つまり、我々が日頃見ているような、どの組織的機関もそれに対応する状況に義務的にかかわり、そこからそれぞれの局面ごとに権威が生成するといったものではありたくないわけだ。

ペーター・ニーダーミュラー：早くもそこへ進んでしまいましたが、シュテファンとヴォルフガングが言ったこと、つまり自分たちの専門分野がどこにまとまるのかという問いです。ヴォルフガングの言う、この専門分野はフィールドでもテーマでも平面にあるものとして議論したり定義したりするわけにはゆかない、というのは正に大事なことだと思います。またシュテファンがマージナルな存在への感情移入をもって指摘したことがらは、非常に複雑な問題です。この問いは、歴史的、またコンテクストに即して議論する必要があるでしょう。この専門分野を統一的なものにするべきではないということには私も賛成です。しかしそれは同質的であっていけないということであって、理論的な絡み合いやまとまりは大切でしょう。またギーゼラが指摘したように、文化研究（人文科学）というスタンプを持ち歩くのではなく、社会科学の一角にあるべきというのも重要です。ヨーロッパ・エスノロジーは、歴史的な作業の学問であるだけでなく、つまりテキスト・図像・イメージをあつかう学問であるだけでなく、社会的な実践形態と行動戦略を分析・解明・解釈する学問でなければならないでしょう。しかし根本的な問題として、自分たちが他ならぬこのベルリンという場所において、出発点となる共通の理論をもっているのかどうかを検討すべきでしょう。それは共通の理論を必要としているという意味ではありません。そうではなく、また統一的ないしは同質の理論を必要とするということでもないのです。それは具体的な論点ではなく、理論的な出発点なのです。実際、この専門分野にはかなりつよい緊張が走っています。ちょっと挙げてみますと、方法論にかんしてです。フィールドワークの方法について議論を重ねる必要があるかどうか、そもそもフィールドワークをどう理解すべきか、といったことです。フィールドワークをめぐる文化人類学のコンセプトあるいは社会人類学のコンセプトをそのままヨーロッパ・エスノロジーに持ち込んでもよ

いのかどうか、むしろディスクール分析[19]の方法とかかわるべきではないか、といったことです。

もう一つの点を挙げますと、自分たちの自己社会のなかの問題複合としての異質性と異質性の経験があります。これはベルント=ユルゲンが指摘したところですが、ちょっと逆転させてみることもできます。つまり、そもそも自己社会というものがあるかどうか、あるいは（皆さまが予めペーパーで準備していただいたことでもありますが）本来あるのは複合社会ではないか、ということにもなります。ちなみにこれは、イギリスの社会人類学でも常に議論されてきた点であることを指摘しておきたいと思います。理論的地平というものがあって、この研究風土のなかに自分を位置づけるためには、どの時点かで、また何らかのかたちで立ち位置をさだめる必要があります。しかもそれが、これまでこの分野ではほとんど議論されてこなかったのです。

ギーゼラ・ヴェルツ

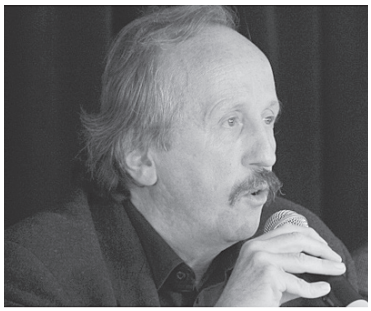
ギーゼラ・ヴェルツ：はじめに言ったことがらに続けて申しあげたいのです。それは、私たちが生産するのはいかなる学問的見地であり、どんな種類の学知であるかということ、またそれが機関組織的な位置づけにどう作用するか、という点です。ヴォルフガングがキイワードとして予見をあげましたが、私もこれはきわめて重要だと思います。それは、私たちが回顧的な視点と予見的な視点の境界を行き来する作業にたずさわっているからなのです。この境界往来には大きな問題がともないます。回顧的なパースペクティヴと予見的なパースペクティヴとが分岐するラインがあり、それはとりもなおさず、文化研究つまり人文科学と、他方、社会科学との境界ラインをかたちづくっています。まったく予見の側にあるのは困難でしょう。私たちの専門分野は、ものごとがいかにして成りいたったか、そしてそれらが今日何であるのかを説明してきた分野なのです。しかし私たちは、社会的行為をめぐっては、節度[20]と非予測性、予期せぬ結果を深刻すぎるほど深刻に受けとめ、予見はおそろしく困難だ、と言うことによって、とても慎重にふるまってきました。しかしそれにもかかわらず、何か道を探りださなければいけないでしょう。歴史的な推移や自制や結果の予測不能をめぐる知識をかかわらせる道です。文化比較をより強めることをもとめられています。またそれによって、デモクラシーを通じてもたらし得る未来の青写真の提示をももとめられています。

ベルント=ユルゲン・ヴァルネッケン：この専門分野が予見をなし得るかどうかは、日常生活、アグネス・ヘラー[21]の言葉を借りれば社会生活の変化を促進するイースト菌がどれだけあって、また、他の諸々の騒音のなかでこのイースト菌の発酵を聞きとれるソフトな

エスノグラフィーの方法がどれほどはたらくかによることになるだろう。しかし好ましいのは、断定的な空疎な予見よりも、むしろ相対的で仮説と推量を手立てとする予見だろうね。一例を挙げれば、自国の映画のなかで暴力の場面を禁じればストリート・ヴァイオレンスは減少するであろう、といったもの。――そうした罰則の機能に、この専門分野もこれまで以上に注意をはらわないといけない。フィールドワークやテキスト解読において自己省察的な変化が起きたことが、近年、研究者に特に自己分析に向かう傾向をうながしている。自己を分解するのであり、それが、やみくもに先へ歩むことを押し止めてくれることになる。自己省察的な検証装置を手立てとしてフィールド自体について発言することが、フィールドにおいて行為者に役立つかも知れないわけだ。

しかしまた時宜を得た助言を提供しようとするなら、先ずは、自分がどのフィールドについて十分な資格があるか、どのフィールドに対して資格を持ち得るかどうかを検討しなければならないだろう。で、ここで急カーブを切って、提案へと進みたい。我々は数々の弱点をかかえていますが、それでいながらやはり研究作業において競争力をもとうとするなら、教育・研究について重点項目を強調し、特定のフィールドについて継続的に競争力をつよめることに、これまで以上に意をもちいるべきだろう。たとえば長期間にわたるプロジェクト、また複数の機関の所属者がかかわり、またかかわる過程で修士論文や博士論文が作成されることをも念頭においたプロジェクト。そうした大掛かりな企画は、そうであるだけに、それにかかわる個々人の関心や性向や能力をも射程において幅をもつことがもとめられる。その点で思い出されるのは、ここベルリン地域でおこなわれた規模の大きなプロジェクト[22]や、私自身が属するテュービンゲンにおけるキービンゲン・プロジェクト[23]で、いずれも多くの学生と教師がエスノグラーフとして自己を育成するとともに、さまざまな部分テーマや関連分肢に取り組めるものだった。同時にまた協調効果が出たり、専門知識の面でも長期による適応の向上がみられたりもした。作業にかかわった諸機関も一般の注目をあつめたものだった。これら一連のプロジェクトを隣接分野の専門家と協同しつつ、同じ水準に立ってこなすことができ、しかもそれは決してバックラウンドミュージック程度のものではなかったという評価を得もした。感想を言えば、そうした長期のプロジェクトでの共同作業は、特定の理論と方法にしばられた企画よりも、むしろ容易かもしれない。もちろん個々の機関の枠組みでは不可能で、望ましくもないのだが、その代わり、共同プロジェクトでは、それ自体も、関連した部分プロジェクトもそれでよいかどうかについて検討を加え、たがいに交流をかさねることが必要になると思う。

ペーター・ニーダーミュラー：大変重要な御意見であり、議論すべきでしょう。しかしその前にヴォルフガングとギーゼラが指摘し、ベルント＝ユルゲンも触れた機関組織について検討してみたいと思います。誰にも明らかなことですが、自分たちの領分、すなわち分野の範囲を確定するとすれば、それは学問がシンボリックには戦場の意味をもつことに



ペーター・ニーダーミュラー

なります。そうしたさまざまな分野はそれぞれに伝統的な境界をもっていますが、そこで突然、新しい学問が現れたような様相になっているわけです。その新しい学問が、否を言い放つのです。つまり、新たな境界に取り組んでいるのです。すると当然にも、シンボル的な陣取りないしは権力闘争とも言えるものが勃発します。〈諸君、これはやはり自分たちのテリトリーではないか、君たちが望むものは何なのか〉、ということになります。しかしまた、その境界が本当にまったく新しいものなのかどうか、という問いが残っています。もしそうなら、つまり自分たちが社会科学のディシプリンと文化研究のディシプリンのあいだの伝統的な境界線をまたいで両者をいくらか混ぜ合わせようとするなら、それはそれで当然ながらそれに相応しい理論的な検討を要するでしょう。しかし検討は欠けています。もう一度言いますが、ヨーロッパ・エスノロジーはなお共通の理論的な出発点をもっていないと思うのです。自分たちが、この専門分野をテーマや自己像について定義しようとしないなら、すでに申し上げたように、正に理論的な検討をしなければならないのです。そうしたものを持たず、かかわりもしないとすれば、専門分野を機関化することなどできないでしょう。

シュテファン・ベック：僕自身も、幾つかのディシプリンを冒険的なまでに跨いだコンテクストをもつ研究作業にたずさわった経験があり、そのためこの専門分野が正統性をもつかどうかについて重圧を感じてきました。しかしそうした正統性の重圧下では、また別の状況になります。たとえば、先に言われた二つの問い、すなわちインクルージョン（包括）とエクスクルージョン（排除）[24]、あるいはイノヴェーション（刷新）[25]とトラディツィオーン（伝統）と取り組むなら、それは理論作業の分野で仕事をしていることになります。それはもちろん、社会学の側から集中的に取り組まれる研究領域でもあります。それにあたってエスノロジーのパースペクティヴから発言しようとするなら、これまでのディスカッションや前提やパースペクティヴにも取り組まなければならないのは当然です。のみならず、1980年代に生み出された経験型研究にもかかわることになります。僕自身の得た成果や解釈が、社会学のなかで確立された見方と食いちがうなら、それはそれで批判的に問題にされなければなりません。アフター・モダンの諸条件の下、インクルージョン（包括）とエクスクルージョン（排除）へと作業を進め、またそれが、必ずしも他の社会科学の諸分野から無視されるような特殊すぎる研究フィールドでもないとすれば、社会学からの求めや批判にも応える責任を負うことになるでしょう。もちろん責任は、その作業がディスクール分析である以上、人文科学に対しても同じように負うことになります。伝統

的な諸々の専門分野のあいだの境界が透け々ゝになり、学際的な取り組みへの能力がますます問われているとき、この専門分野で学んでいる人たちがそうした学際的なディスカッションに臨んで遜色なくやってゆくには、彼らにどんな理論装置を準備してやれるのか、これは僕にとって退っ引きならない課題なのです。

Ⅱ．専門分野の伝統と境界

レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ

レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ：問題は、伝統的なものとしての大学の構造ともかかわっています。諸々の専門分野にもそれが関係します。しかし検討にあたっては、つまり社会的な状況の分析のためには、共同作業としておこなわれる研究プロジェクトへと進むことも大事なことでしょう。それは特定の時代区分においては、社会学と文化研究（人文科学）とヨーロッパ・エスノロジーの重なりにもなってゆきます。また他の場合には、生化学、また特殊な分野である発生学と組んだ研究プロジェクトになるでしょう。私たちの専門分野はとても小さいのですが、そこでの困難として、専門分野としてのアイデンティティをどのようにして確立するのかという問題があります。あるいはそもそもアイデンティティは問題にならないかもしれません。何であれ実態をとらえるはずのもの、むしろ理論がそれにあたるのではないでしょうか。私には、これこそが本質的な問題であるように思えるのです。ベルント=ユルゲンは、これからも、かなり長期にわたる研究プロジェクト、また多様な専門分野が協同することを特徴とするプロジェクトを組むかどうについて言及してくれました。実際、すでに言語研究者や社会学者や世論調査関係の方々との共同作業もおこなわれてきました。ドイツでは伝統的に大学をベースにした専門分野の境界があり、またそれゆえさまざまなテーマについて協同研究を発展させる必要があるのですが、それはかなり難しい課題なのです。それからなお少し言いたいのは文化研究（人文科学）についてですが、私たちはそもそも、文化研究（人文科学）ではないのです。重要なのは、特定の知覚世界が調査されることなのです。つまり異なった種々の知覚世界が並列していること、それらがどう重なりあっているか、また解釈にまで進むのはどの地点においてであり、またどこで改変の可能性を提示し得るのか、さらに場合によっては予測をも立てるとすればどこで踏み出すのか、といったことです。私見を言えば、これには、そうした認識を歴史的な推移のなかに位置づけることや、またそこから現代を見直し、さらにパースペクティヴについて青写真を提示し得ることも含まれます。

ヴォルフガング・カシューバ：端折って言えば、普遍的なものと特殊専門的なものを対比させて記述すべきということなのだろうが、実に難問だと思う。我々は多くの事象にかかわって記述するけれど、そこで我々がとるのは必然的に普遍的なパースペクティヴになる。その視点に立って他の見方とも協力してゆくのだが、その場合も、社会学者あるいは経済学者として出し抜こうというのではなく、他の分野の資源を自分にとりこむことを心がけることになる。

メソッドのミックスというキイワードは、後追い的な言い方だと思う。それは戦術的なコンセプトではなく、対象に引きずられたコンセプトだっただろう。ところでこの普遍性は常に、特殊専門性をもとめる外観を呈することとバランスをとっていなければならない。つまり内的な省察が異質的であるのに対して、外観は同質的かつ静的にとどまるわけだ。この要請の下にあることを、皆さん方が作業をする場合、どの研究所であっても他の研究所の仕事もそうであることを分かりあっている。しかし私はこれを、専門分野の連続性[26]の角度から押さえておきたい。つまりイノヴェーションを問う場合も、あるいは統合を問題にする場合も、たとえば儀礼と行事[27]のキイワードの下であつかう限り、そう言えるわけだ。と同時に、当然にも支配と社会をめぐる問いでもあるである。またそうである限り、歴史家も社会学者も、我々を叱責はしなかった。たとえ我々が手がけるのが、精々、脚注にしかならないような微々たる局面であるとしても。ちなみに我々が社会科学に参画するようになったのは1970年代と80年代からだが、町村体研究が中心点となり、またそれが諸力の結集核になったことによって、はじめて事情は違ってきたのだった。忘れてはいけないが、我々の専門分野の四分の一は村落調査だった。つまり、突然、畑のなかにキャンプを張ったわけだ。そこを他の専門分野の調査隊が通りかかって、〈君たちのやっていることも悪くはない〉とコメントをするという関係だった。

そうした問題性のなかに我々はいつもはまりこんでいたが、その原因は簡単だ。理論をめぐって本格的なディスカッションが組織されることがなかったからだ。思うに、昔も今も、我々のディスカッションはテリトリーのなかでしか企画されてこなかった。つまり巣に逃げ帰っていたわけだ。歴史学や社会学や経済学の研究者の場合、その境界は常に動いていて、それと共に核の部分もしっかりしている。専門分野が、たとえばベルリン（で推移したヨーロッパ・エスノロジー）の評価をめぐる現下の状況でその構造を改めて根拠づけなればいけないとすれば、現時点でも十分それをたしかめることができる。二種類か三種類のモデルによってそれは可能だろう。歴史家は時代区分のモデルをこころみ、政治学者は政治学という分野で、やはりモデルを立てるだろう。社会学者は、これまたある種のシステム、それもマックス・ウェーバー[28]からそう離れてもいないようなシステムに従うだろう。しかし我々は、19世紀のフォルクスクンデ（民俗学）の諸概念では、つまりそのころ範例であったような諸観念ではやってゆけないのだ。そうしたものが揃っていたとして

も、今日の我々の立脚点はそれでは描けない。もっともっと考えを深めなければいかない。

ギーゼラ・ヴェルツ：種々のディシプリン間の分担に際して私たちに割り当てられた立場から、私たちはたしかにはみ出しています。それは明らかです。まさにそれゆえ問わなければいけないのは、境界の線引き、あるいは境界の定義なのではなく、私たちがおこなっているいわば領域侵犯的な作業をどのようにして正しいものとして説明するか、だと思います。なぜなら、私たちは、他の諸々のディシプリンと手をたずさえて管轄範囲を形づくり、またその諸分野のなかに私たちの管轄範囲を確認しようとしているのですから。またそこで他の諸分野との共同作業を行おうともしているからです。私が問題だと思うのは、ヴォルフガング、貴方を誤解しているのかもしれませんが、理論すなわち共通の認識論的・理論的前提と共通の研究対象が諸分野間のコミュニケーションにおいてはきわめて重要だということです。シュテファンが語ったように、その点、社会学はある種の部分ではほとんど80年も先行しています。とは言え、何かを言えるためにはその80年を一挙に挽回しなければならないと考えているわけではありません。しかし、そこに接続できるように率直に見直さなければなりません。ということは、諸分野のヒエラルヒーにおいて私たちが先頭を走っているのではないのです。社会学の研究者たちに私たちのエスノロジーの理論、フォルクスクンデの理論を押し付けるような立場にはなく、むしろ逆なのです。社会学の研究者にも理解されるようなターミノロジーで語るとは、どう語ることなのかということなのです。

ヴォルフガング・カシューバ：ちょっと言わせてもらうなら、我々が日常史や日常文化や日常経験といったキイワードをたずさえて学際的な野を切り開いたからといっても、1980年代や90年代に我々が非常に特殊な局面にあったとかどうか、それが誰にも肯定されないようなものであったかどうかということになるだろうか。誰それは歴史家になってしまったとか、社会学者であったとか、また別の何かであったか、といったことは問われなかったし、もはや問われもしない。

ペーター・ニーダーミュラー：今ギーゼラが言ったのは、すごく大事なことだと思う。自分たちには、理解されるだけの言葉が必要だということです。その点でもう一度考えてみなければいけないのは、ヨーロッパ・エスノロジーを主要にフォルクスクンデの伝統から導き出すのがストラテジーとして正当なのかどうか、ということです。だからこそ、はじめに申し上げたのですが、ヨーロッパ・エスノロジーは、事実として現代化されたフォルクスクンデ（民俗学）と解するほかないのかどうか、これをもう一度検討する必要があると思うのです。もう少し開けた議論に踏み出すなら、別の扉が開くでしょうし、発言をするときにも、これまでとは違った可能性が出てくるでしょう。

たとえば、1970年代から80年代の文化人類学において起きたことを思い返してもよい

でしょう。その頃、理論によって学問が変わってしまうことが実際に起きたのです。研究分野が新たに定義されたのではなく、クリフォード・ギアツ[29]の解釈学的な人類学、あるいはその後のライティング・カルチャーをめぐるディベイト[30]、どちらもまったく理論的ディベイトだったのですが、それが伝統的な素材に取り組んだのです。そして当時、これについて発言が相次いだのを思い出します。たとえば社会学、またその他の社会科学の研究者にも部分的にとりあげられ、発展させられたのでした。もちろん、必要なのは理論だけと言っているのではないのですが、この理論という領域でもっと活発になることが大事だと思うのです。実際、新たな理論的な萌芽になるものが重要なのです。この専門分野においてこれまであまり活用されていなかったオプションや可能性、事実として集中的に取り組まれてはいなかったオプションや可能性です。

ヴォルフガング・カシューバ：誤解を生まないために、というだけですが、ここで区分をしておきたい。学問をめぐるディスクールにおいて理論が論じられるということ、これ自体は問題ではありません。しかし、文化人類学、たとえばアメリカの文化人類学は、ただただ一直線でもなかった。クリフォード・ギアツを見れば分かるが、本質にかかわる理論をめぐって議論が始まる前にも、さまざまなポジションが埋まっていた。その点では、〈厚い記述〉をキイワードとして取り上げたいのです。誰も、そこでは新たな理論が古典的な意味で繰り広げられた、などと言うことはできないだろう。むしろ理論をめぐってディスクール・システムが作動したのであり、それが非常な影響力をもったのだった。こうしたすべても、それらが学問風土を今はじめて特徴づけるものとなったわけではない。一面では、常に理論的な新たなコンセプト作りの議論が提起され、しかし他面では（かなり大きなスパンで学問の諸空間を見るなら）諸々の専門分野を戦術的に別の方面へつくり変え、別のものに組織化するということだ。これを跡づけるのは、そう難しくない、と思う。これは、理論に対抗する議論ではなく、むしろ、学問が実際作業としてより厳密に反省されることでないか、と指摘しておきたい。どのようにして誰がどんな資格をもつことになるのか。そこでは理論をめぐる論議は、しばしばストラテジーにかかわる論議なのだから。

シュテファン・ベック：しかし実作業には、それはそれで（しばしば自覚的ではないような）理論があるのは当然です。僕たちがめざしてきた課題の一つもそれなのです。中心になる新しい研究課題とは何であり、そこにどんな理論が内在しているのか、という課題。その点で、ベルント=ユルゲンの指摘は重要だと思います。具体的な研究課題、つまり学問的な実作業に着手すること、資格は研究を行なうなかで確立されるのでなければならないこと。実はいつだってそうなのですが……

ベルント=ユルゲン・ヴァルネッケン：定義することだけに重点をおかず、むしろ新しい定義が、実作業すなわち研究のなかで現れるのでなければ……

シュテファン・ベック

シュテファン・ベック：そう思います。よく議論されてきた専門分野のアイデンティティという課題、もっとも、アイデンティティは当然ながら常に後追い的な構成物です、またアイデンティテイが状況に依存すること、これ自体は外国人の（アイデンティティを含む）日常にかんする研究の場合でも強調しておきたいのですが、そこから出発するなら、専門分野のアイデンティティも、実作業、すなわち共同作業と具体的な知識生産の諸形態から生まれるのです。専門分野のアイデンティティをめぐる多くの議論では、独自の学問的実作業を前に独自の理論が適用されているのではなく、実際はアイデンティティが主張されているのです。それも定かでないままに、でしょうね。実際、研究フィールドとしてすぐ頭に浮かぶ領域でも、そこでの内在的な理論とは何か、が本来問われるべきでしょう。そうした実りが期待できる幅のある研究プロジェクトとしては、何がそれに当たるでしょうか。ドイツと近隣諸国の別々の研究所がもっていたさまざまな傾向が何であったか、果たしてピンと来るのでしょうか。労働者文化の研究[31]、キービンゲン・プロジェクト、あるいは（マグデブルク）沃野（ベルデ）[32]、といった長期的に設定されたプロジェクトが出てきたときの諸々のフィールドとは何だったのでしょうか。

Ⅲ．東西ヨーロッパ間の専門分野のパースペクティヴ

ヴォルフガング・カシューバ：シュテファン、君の二つ目の問いに対しては中間回答くらいしかできないのだが、これをそんな風に議論してゆけば、旧・東西ドイツのエスノロジーそれぞれへの問いかけも、西欧・東欧問題というより、何よりも専門分野の変化ならびに社会の変化を問題にすることになってゆくね。だって我々は、（文化と生活様式を問うた1970年代の言い方をもちいるなら）日常と支配を問題にしているわけだから。今日では表立ってこういう言い方はしなくなったが、その時代には重要な座標軸だった。経験史・日常文化・個体の発見という学際的なフィールドにおいて、多くの人々の表情に何か新たなものが浮かんだ時代 —— たしかに今日では、日常と支配は意味もたなくなってはいるけれど。それに相当するテーマをこれからもう一度取り上げるなら、エスニシティやナショナリズムを問うことになるだろうね。これはストラテジーとしては、1970年代後半に村落と生活世界を問題にしていたのとはまったく別の視点ではあるだろう。同じくシンボルの生産とシンボルの実態を調べても、これまた1980年代に宗教性や巡礼が問われたのとは違った状況になっている。したがって、こうした思考、もう一度、東西それぞれ

の伝統に目を向けるなら、対象とパースペクティヴの変遷が否応なく入ってくる。となると、明確な輪郭は消えてしまうことにもなってしまうのだが。

ギーゼラ・ヴェルツ：以前もそうだったのです。他でもない村落の生活世界です。フランクフルトの場合、町村体研究でも、まったくインパクトの種類が違っていたのです。おそらく文明の危機と言ってもよいようなもの。しかしまた、モダニゼーションの進行に対して防塁を築くようなある種の道徳的なインパクもあったのです。村落の文物で使えるものなら何でも持ってくるということでした。もちろん、だからこそ潜在的には多彩なのでしょうけれど。

ヴォルフガング、貴方のもう一つの問いかけですが、私は、イーナ＝マリーア・グレヴェルス[33]の〈文化と日常世界〉、いわば私たちにとっての規範（カノン）でもありますが、これを読み返してみました。偏に文化と生活世界を見つけることを期待してのことでした。しかしそのとき、まったく忘れていたあることに気づいたのです。私が大学生の頃には、フランクフルトではソ連のエスノロジーもたいそう強く受け入れられていました。特にエトノスという面においてでした。そもそもエトノスをどう定義するのか、特定の社会のなかでの文化的な多元性がどのように可能かになるのか、こうした項目や合言葉だったのですが、アメリカの文化人類学と並べて、あるいは部分的にはそれに対抗するものとしても取り入れられたのでした。もっとも今日では、それはフランフルトでも議論されなくなってしまいました。それまた一連の新しい要素を受容したことの現れです。つまり、ライティング・カルチャー、内省性、グローバリゼーション、トランスナショナルな推移、等々で、これらによってフランクフルト大学における私たちの専門分野は新たに基礎づけを得たのですが、またそれらと共に専門分野が背景に後退することにもなってしまいました。目下、私たちは、これ自体についても議論をしています。なぜなら、たとえば文化エコロジーの要素でも今日では通俗化して方法論の積み木箱のようになってしまっているからです。そのため、これからは、また新しい要素や新しい前提の下で再建を図ることが必要となっているほどです。

ヴォルフガング・カシューバ：それが、我々が行なってきた脱規範（カノン）の帰結だと言っているのかな。新しい世代の学生が次々に現れるなかで何が起きているかに注意を向けるなら……

ギーゼラ・ヴェルツ：私も規範（カノン）の語は、今、もちろんカッコ付きで使ったのですが、同時に真剣に受けとめてもいます。なぜなら、知識社会学が学知の公理化と名づけているものには、私たちは本当に不得手なのですから。

ヴォルフガング・カシューバ：たしかに、キービンゲンあるいは（マグデブルク）沃野（ベルデ）のなどのキイワードは、学生たちにはまったく通用しなくなっている。それにはもちろん我々にも責任がある。

ベルント=ユルゲン・ヴァルネッケン：ずいぶん時間が経ったからね。もちろん、これらのプロジェクトを受け継がなければならないわけではない。先に挙げられた長期のプロジェクトでも、地域研究や町村体研究の伝統を継続させなければならないわけでもない。むしろ、各地のインスティテゥートはそれぞれ独自の考え方をもってよいと思う。一つの可能性をスケッチ的に挙げみるなら、たとえば近年のいわゆるライフサイエンス（生命科学）の影響の実情を長期的なエスノグラフィーとしてとりあげるといったこともそうだろうね。つまり、自然や人間や社会をめぐって広くおこなわれている議論の推移、実際、素人でもこのライフサイエンスをディスカッションや物質面、さらに実際的に活用できるのだが、それらの推移を長期的に追跡するエスノグラフィーといったものも考えられる。事実、社会的に受け入れられた形態についての情報がエキスパートにフィードバックされることも観察されている。あるいはちょっと青写真を描くなら、ある種の状況におかれている子供や若者に何年も付き添うような独自の長期プロジェクトを始めてもよいと思う。つまり彼らを、家庭や学校や実習や余暇において追跡し、また彼らの社会関係と行動範囲とメディア消費と言語生活のなかでの多文化性とインターエスニシティの度合いを問い、それを結びつけてゆくわけだ。その際、私自身が手がけるなら、多文化性の調査には、社会関係の階層・階級の幅をも必ず組み込むことになるだろう。さらに、昔から村に住んでいる〈古くからのドイツ人〉にもアクセントをおいてみたい。それがマジョリティの文化だからで、またその発展あるいは未発展が特に意味をもつからで、さらにそうした側面には我々の専門分野の伝統が見事な先行研究を残してくれているからだ。しかしもちろん、これとまったく違った種類の事象をもとりあげても構わない。

ペーター・ニーダーミュラー：今の議論は、連続性がどこまで中心的な役割をはたしているか、この専門分野の現状は何か、つまりバランスシートですね。また、ドイツでの、さらにヨーロッパ規模においてこの専門分野ではミックスチャー、あるいは細分化までが存することをも確かめました。それは自分たちが願っていたものとは、やや違っています。ベルント＝ユルゲンの提案が当たっていると受けたのも、この意味においてです。つまり彼は、少なくとも部分的にせよ結束の高まりが見込めるようなプロジェクトを推進しなければならない、と言ったのでした。たしかに、この専門分野の将来的なパースペクティヴを議論しようとするなら、当然ながら、連続性についても論じなければなりません。しかし、どこまでフォルクスクンデ（民俗学）の伝統から導き出さなければならないのでしょうか。むしろ別の支点をさぐるべきではないでしょう。そして、とりわけ新しい研究上のパースペクティヴ、たぶんフォルクスクンデの伝統とはほとんど関係しないような新しいパースペクティヴを切り開かなくてはならいないではないでしょうか。

この点で、具体的な提案はたいへん興味深いのです。またそれをめぐってきわめて具体的な議論がされることになるでしょう。しかし銘記すべきは、自分たちが多くの場合、専

門分野として求められるにはいたっていないことです。これは、単純に過小評価と言ってすますわけにはゆきません。そうではなく、こちらからもまた問いかける必要があるのです。で、こちらが問われる場合、提供できる何かがあるでしょうか。皆さんは、ユルゲン・コッカのこの本、労働の未来像を描いたこの本[34]をご存知でしょう。これは学際的なプロジェクトで、歴史家や社会学者などが一緒になって編集したのですが、エスノローグは誰も参加しなかったようです。しかし労働の未来にかかわるもの、あるいは労働の社会的・政治的実勢は、社会的な問としては、今日やはり肝心なことでしょう。そこで、問いたいのです。もし自分たちに求められることがあるとすれば、こちらは何を提供できるか、と。これもまた、ベルント＝ユルゲンがリストにあげたフィールドの一つではないでしょうか。つまりライフサイエンス（生命科学）、カルチャー（文化）、ディファレンス（相違）、この 3 つは非常に重要なキイワードです。これらの諸分野の内部で密度の高い研究プロジェクトを推進すること、それを試みるのは、自分たちにとって未来のパースペクティヴではなかろうかと問いたいのです。それは、自分たちの専門分野を部分的に放棄することになるかもしれませんが、それはどちらでもよいのです。もっともそうなると、コンセンサンスを得るには組織的な面では永くかかるかもしれませんが。

ヴォルフガング・カシューバ：学問上の（他分野の）同僚についてもう一度事例を取り上げてよいなら、その（ユルゲン・コッカの）プロジェクトが企画されたとき、我々の研究所にも手紙が送られてきた。しかし我々の誰も、自分が求められているという感覚がなかったのだ。〈我々がいなくては、やってゆけるはずがない〉と言っていたわけではなく、むしろ〈興味深い〉との反応だった。しかし自分がそれに該当するとは言い切れなかった。

ペーター・ニーダーミュラー：自分たちが適してはいないと感じたとまで言いませんが、そう多くの発言ができると思えなかったのです。

ヴォルフガング・カシューバ：職人的に一度考えてみるなら、自分たちの専門分野のテーマとプロジェクトとして何があり得るかをこそ議論しなければいけない。これが、歴史家や社会学者の世界なら、別の議論になるだろうね。我々がおかれている状況は、いろいろなテーマが入っている大きな積み木箱を前に、しかも比較的自由度が高いという感じだね。歴史家や社会学者なら、たぶん議論しないだろう。彼らは、外的な枠組からも内的な結びつきからも、テーマについては二つか三つのオプションを選べばよいからだ。おそらく彼らは経験をもとに知っているのだろう。学問が機能するとは正にそういうものであって、またそれによって位置を得、リリースもでき、連続性もつくられるということを。これは、先に我々の機関組織をめぐる問題に因んで申し上げたところでもある。もっとも、そこには厄介な問題もある。いつも言っていることなのだが、我々は、巨大なタンカーではなく、カヌーかカヤックなんだな。活発に動き、どこでもカーブを切ることができ、どんな入江も覗ける。しかし、しっかりした竜骨をもたないので、たちまち転覆する恐れが

ある。このベルリンの研究所の場合で言えば、キイワードに絞るなら、ナショナルかつエスニックなアイデンティティ構成に大きな比重があり、しかもそれを自在にコントロールしてきたとも言えない。それに向けた幾つかの研究プロジェクトが組まれ、また約10篇の学位論文が書かれ、3篇の教授資格論文が実現した。それらは決してストラテジーとしてなされたのではなく、教育・研究のキャパシティが固く結びついていたのは間違いが無い。またその構成は、他の専門分野とはまるで違った異なったものでもある。ちなみに他の分野とのかかわりでは、我々はゲストとして参加したのであり、知ってもらおうとし、時々受け入れられることもあるということだと思う。結論的に言うなら、いかなるストラテジーで活動すべきかを、もう一度考えるべきだろう。我々が、きちんと説明のつく諸条件を背景にしており、学術文化として特定のハビトゥスをもっていること自体は明らかなのだから。

レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ：それは、いくつもの側面から論じられてきた問題でもあります。続けてさらに語ることもできるでしょう。しかし同時に関心を惹かれるのは、ペーターが口火を切ったことなのですが、東ヨーロッパの事情、そこでは1990年代の変化によって専門分野とその方法などをめぐる問いがどう変わったかということです。ペーター、貴方が先ほど言ったのは、伝統的なフォルクスクンデ（民俗学）の方向をとる人々がいる一方、文化人類学の方向の人々も少なくないということでしたね。東ヨーロッパのエスノロジーでは、実際に、西ヨーロッパやアメリカの研究に由来する概念や理論の受け入れるのが特徴になっているのでしょうか。

ペーター・ニーダーミュラー：言うまでもないことですが、この研究分野を完全に知っているわけではありません。すでに（東西ドイツの再統一などの）大転換の前から東ヨーロッパにはさまざまな伝統が存在しました。つまりポーランドにも当時のユーゴスラヴィアにも常に文化人類学はあったのです。それ自体はよく知られていました。もっとも、たとえばハンガリーや当時のチェコスロヴァキアでは、その情報はほとんど無かったのです。その後、自分が見る限り、この文化人類学はたとえばポーランドやチェコやルーマニア、またセルビアでも、今日ではほとんどヘゲモニーと言えるような位置を占めています。だからと言って、エスノグラフィーやフォルクスクンデが存在しないということではないのですが、力関係は大きく変化したのです。ハンガリーでもチェコスロヴァキアでも、ヨーロッパ・エスノロジーが、伝統的な民俗研究を正当化する〈ラベル〉として使われています。フォルクスクンデ（民俗学）はもはや存在しない、あるのはヨーロッパ・エスノロジーだ、といった言い方がされたのです。ではそこでは何がおこなわれているかを見ると、1970年代や1980年代になされていたものとまったく同じなのです。もっとも、東ヨーロッパの研究風土の実態はもっと複雑なのだろうとは推測しています。

レオノーレ、貴女の質問の後半、つまり、こうした西ヨーロッパやアメリカの諸理論が

どこまで取り入られたについては、その受容は、むしろ個々人の次元で違ったものであったと思います。寡聞にして、これぞ〈up to date〉という研究者を知りません。理論と方法についてそうですし、ドイツにかんする研究成果でもそうです。そこでは研究機関がそうした受容にかかわることはなく、むしろ国際的なコンタクトをもつ個々人にとどまっていたようです。いずれにせよ、ヨーロッパ・エスノロジーは東ロッパでは、ドイツあるいはスカンディナヴィア諸国とはまったく違った状況にあると思います。

ヴォルフガング・カシューバ：しかし類似点もあるのじゃないかな。ドイツの場合でも文化人類学となると、名前をあげてもよいのはイーナ＝マリーア・グレヴェルスだけだろう。また民族学（フェルカークンデ）では、私の誤解でなければ、アメリカの影響よりも、イギリスの刺激の方がずっと大きかったと思う。

ギーゼラ・ヴェルツ：歴史的には、今日では、民族学の世代交代もあって、それは大きく変化したのですが……

ヴォルフガング・カシューバ：今はそうだね。

ギーゼラ・ヴェルツ：ペーターの発言について言えば、もちろん機関組織の組成も関係するでしょう。となると、ヨーロッパの諸学会とその担当分野、その活動の程度、また根本的には学術ポリシーとディシプリン・ポリシーを問うことになります。今日、そうした議論の場ではSIEF（インターナショナル・エスノロジー・フォークロア協会）[35]が存在します。この組織は、その東ヨーロッパにおけるいわば業務相手としては、ヨーロッパ・エスノロジーに取り組むと称している人々、そして基本的には貴方が今指摘されたように、どちらかと言えば旧来の問題関心をもちつづけている人々に限定されているのでしょうか。あるいは、文化人類学や社会人類学の方向にある研究者とは縁をもつ必要がないとでも言うのでしょうか。言い換えると、EASA（ヨーロッパ社会人類学協会）[36]と手を組んで共同作業や重なる分野に取り組むことですが、私自身は、それがストラテジーとしても重要であると思います。ヨーロッパ・エスノロジーがヨーロッパ規模でこの専門分野を代表することになったとしても、特定の研究者の行き場なくなるとは思えません。彼らも文化人類学者や社会人類学者であるわけですから、他の学会に属してもいるわけです。

ペーター・ニーダーミュラー：それは同感です。つまり文化人類学者や社会人類学者を自認する人たちが共同研究をむしろめざすことも可能でしょう。実際、文化人類学は、東ヨーロッパでは、大きなシンボリックな資本をもっています。理論的にもポリシーの上でも。

ヴォルフガング・カシューバ：事実、それが我々の状況にフィードバックした度合いも高い。なぜなら我々は、学際的な広がりにかかわっているだけでなく、（我々の専門分野を人文科学と社会科学にはさまれた広い領域と見るなら）信じられないほどの不均等、国際的な不均等にもかかわっているからだ。同時に我々は、一面では日常の歴史や経験や権力

について語るとともに、他面ではテキストと構成に取り組むエイジェントであるわけだ。比較研究や、その他の方法についても話題にしている。したがって、連続性のどのラインを発展させようとするのかはかなり難問でもある。それはそうしたラインが、内部に対しても外部に対しても我々の立脚点にとって重要だから。実際、コントロールしつつ補ってゆかなければならないのはどのラインだろうか。これを言うのは、文化人類学の議論も、まるで違った合言葉を掲げてはいるものの、クラシックなフォルクスクンデ（民俗学）のテーマに含まれる面があるからだ。この二重のモデレイション作業に、他の専門分野が従うことはほとんどないだろう。こちらが、文学研究を思い浮かべたり、歴史学を覗いたり、社会学に注目したりして、それらを隣接学と呼ぶとしても、それらはそれらで、あれこれの次元を選んできていた。歴史学の研究者は、文化をめぐる論議から推測されるのとは裏腹に、学際性とはほとんど無縁なのだが、国際的にはメインストリートに登場する。また言語学者（リングイスト）たちは、我々にも開いた姿勢をとっているけれど、言語論的転回[37]においては当然にも、我々よりもずっと主導的な立場にあったわけだ。

レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ：ここでは東欧を引き合いによく出していますが、EU 規模のパースペクティヴにおいては、ヨーロッパ・エスノロジーは、EU という文化形成体を理解し解釈する課題をどの程度まで担当すべきでしょうか。私が問いたいのは正にこれなのです。私たちのモデルはそもそも適切であり得るのか、あるいはヨーロッパ・エスノロジーはこの問題を問い返す課題をどこまでもつことができるのか、ということです。ヴォルフガングも口火を切ったことですが、〈近代化の挽回〉[38]あるいは〈独裁の比較〉[39]といったキイワードの下で研究をおこなうのは、研究対象にとって、つまり社会的グループや文化的グループ、また他の諸々のグループに実際に適っているのでしょうか。ヨーロッパが狭くなる一方という状況で、そこで浮上する諸々の社会集団や軋轢の種類を理解するために私たちが踏みしめている土台は、果たして適切な土台と言えるのでしょうか。

ヴォルフガング・カシューバ：それについては、歴史家たちとディスカッションをしたことがある。キイワードはナショナリズムの挽回[40]だったが、このキイワードを私自身は、実際には植民地主義的なモデルと見ている。似たようなことが、社会学者のあいだでは、近代化のコンセプトをめぐって起きている[41]。しかし我々は、明瞭な反対コンセプトを持っていず、それを展開させるのも難しい。我々がドイツ社会のなかで、また東欧の隣国の社会に見出すところのものは、そもそも何であるのか。生物学的・集団的な種類の経験地平、過去経験を、現在経験やそれをもとにした将来性のあるパースペクティヴをつくり上げること、どうすればそれが可能なのか。目下、我々がワークシェアリングを行なっているのは明らかだろう。つまり一方は、書誌アーカイヴにおける伝記収集の平面で、〈当時はどうだったか〉が問われ、他方は、これから〈新しい〉社会へ導かれ、ライフスタイ

ルを土台にして現実化されるところのエリート・ディスクールになる。これを社会学者たちは多くの場合、きれいに区分している。一方は追憶文献、他方はライフスタイル研究という具合にね。

ペーター・ニーダーミュラー：一言付け加えるなら、ヴォルフガング、貴方が立てた設問は、社会をよりよく理解するためにヨーロッパ・エスノロジーが何をなし得るか、ということだと思います。しかしあれこれの社会に取り組むのはいかなるパースペクティヴからなのでしょうか。むしろ自分たちが記述し分析すべきは、ミクロの分野、経験空間やそれに類したものではないでしょうか。あるいは、時にはマクロ的な推移について語ることができるかもしれません。たとえば、ヴォルフガングがふれたエスニシティ研究やナショナリズム研究をとりあげてみましょう。すると自分たちもエスノローグたちも、ミクロの領域にはほとんど手をつけていなかったのです。これは自分たちによく向けられる非難です。しかし自分たちが試みたのは、シンボリックでポリシーでもある推移を記述すること、あるいはマクロの動きをシンボリックな秩序として意味解きすることです。で、そこではヨーロッパ・エスノロジーの可能性が高まります。自分が定義的に表現するなら、ヨーロッパ・エスノロジーとは、小さなミクロの世界を描くだけでなく、こうしたより大きな動きについても発言できるものなのです。少なくとも自分の理解では、たとえば社会学がもはや力を発揮し得ないこうして諸分野においても何ごとかをなしえると言えることが大事なのです。たとえば、ある一つの社会が同時にどの程度まで一つのシンボリックな秩序でもあるのか、といったことです。これが、ヨーロッパ・エスノロジーが、東欧でも西欧でも分析することができるものだと思うのです。

ヴォルフガング・カシューバ：以前いつも問われたのは、歴史的空間の深みと社会の現今の広がりを誰がつなぎわたすのか、という問題だった。これは、たとえば、社会学者と歴史家とのあいだでの作業分担という形としてあらわれる。特定の事柄をめぐって、我々の問いかけはこうなるだろう —— 我々のこれらの事柄に対するかかわり方は少し異なる、対象についてももっと特定の迫り方をし、逆にパースペクティヴの点ではもっと一般化を図ろうとしている、と。すると事態は異なってくる。ペーターが先ほど少し取り上げたような別の問題が現れるわけだ。つまり、大きな社会的潮流を分析し、同時にその外に立つにはどうすればよいか、またそうした潮流が社会に浸透するのはどのようであるか、といったことだ。経験と方向づけの平面では実際の作業はどのような様相を見せるだろうか。なぜなら我々は、文化は多くの点において、政治が考えている以上に息永く影響をあたえるものであると感じとっているからだ。ナショナリズムとエスニシズムの説明を模索するのは、単にストラテジーの次元だけのことではない。つまり、なにゆえ目下チェコ人は彼らの新たな国民史を書いているのか[42]、といった（直近の）問いにとどまらないわけだ。我々は同時にこうも問う。こういうことが起きるかも知れない、隣人と談話するには

これが役立つから知れない、外来の人々との付き合いにおける立脚点にはこういうものもあるのではないか、こうした生活世界において人々に対してある種の仲介をおこなうにはどうすればよいだろうか、といった問い。しかしこれは、簡単に調査ができることがらでもない。フィールドワークの面でも、これは新しい行き方になる。一体、どこでそれをなし得るのか。ハンガリー国民が彼らの昔の国王たち再発見[43]をしているのは何故か、あるいは、我々の周りで右翼的な若者文化が美しいイヴェントとなっているのは何故か、この設問をそのままを取り上げるかどうかはどちらでもよいのだが、絶えず、歴史的空間へと、あるいは歴史的空間との取り組みへと促されることになる。それは、歴史家たちがその空間を見ているのと同じようにという限りにおいてではなく、マクロの位相とミクロの位相との結びつきにおいて、すなわち生物学的ならびに生活世界的なコンテクストからということを意味している。ちなみに、アンティセミティズム[44]あるいは排外的な諸観点がどこから来るのかを今日問うとしても、もし同時に古い民俗的な様相に立ち返ることがなければ、回答を得ることはできないだろう。そうした民俗的な様相を通して、歌謡や諺や子供教育やクリスマスの祝い行事の諸々のモデルやその他の幾千もの現象について知ることになる。実際、それらのなかには、今挙げたような視点が引き継がれている。それが、新しいコンピュータ・プログラムや新しい映画など、さまざまところへ入り込むわけだ。文化のなかのかかる深層の組成、それは美しいさまざまな製品にも忍び込み、受け継がれていて、先にあげたような物の見方がどうであるかを知る上で我々にとっては基本的な材料ともなっている。右翼的な若者たちにしても（ヒトラーの自伝）『我が闘争』を読むことはめずらしくなっているが、ドイツ史、つまり西ドイツの歴史や東ドイツの過去にかかわる多彩な製品に〈魅惑的〉なものを感じ取ってはいる。これらを分析するのは、我々の強みのはずなのだ。

Ⅳ. 複合社会におけるヨーロッパ・エスノロジー：理論的・方法論的取り組み[45]

シュテファン・ベック：僕自身の関心は、この専門分野、またその幾つかの枝分かれのなかで、どのように比較研究となっているか、という問題です。この比較研究のパースペクティヴが具体的なプロジェクトにどのように形をとっているのでしょうか。これを言うのは、詰まるところ、僕たちの研究の実作業は今でも非常に時間のかかるものとなっており、個々の研究者はどうしても自分の研究にかかり切りになってしまうからです。多くの事例をめぐる比較研究をおこなうにはどうするのでしょうか。ヨーロッパ次元で進めるのか、つまりヨーロッパに存在する者として研究をするのか、それともヨーロッパのなかの一つの社会を枠とするのか。

ギーゼラ・ヴェルツ：アメリカの文化人類学あるいはエスノロジーのなかでの古典的なインターカルチュラルな比較研究は、個々の研究者あるいは研究グループが実際に比較し合うというものではなかったのです。むしろ原理的には、無数の個別研究をベースにして比較研究がなされたのですが、そうした個別研究はそれまたすこぶる近似した仕組みによっていたのです。と言うのは、研究に加わる人々は、同じ理論的背景を持ち、また共通に受け入れられた研究上の土台に立って作業をしてきたからです。そこで、これらの個別研究を比較の視点からも結び合わせることが可能だったのです。しかし遅くとも1960年代にはそれに対しても批判が定着しました。それは当然でもあるのですが、そうした研究プログラムは個別研究を強く制約するコルセットでもあったわけですから、またその結果、個別研究は一部では現実の文化的状況にはそぐわなくなったのですから。しかし比較研究の可能性、社会比較を一つのプロジェクトのなかで行なう可能性、またそのためにチームを組むこと、これらを追求すること自体は大変重要でしょう。

ヴォルフガング・カシューバ：ヨーロッパ・エスノロジーの利点は、文化をめぐって啓蒙をなし得ることも不可能でないことだろう。つまり、諸々の現象を比較・整理するときには、ということなのだ ―― しかしそれには常に二つの行き方がある。一つには、能うかぎり方法論的な透明性を確立することで、それは個々の取り組みを比較し合えるためだ。二つには、コンテクストを重視することで、それは関わっているのがどの部分であるのかを認識するためであり、またそれに意味があるのかどうかを比較商量するためであり、そしてそこから逆に推論を引き出すためでもある。しかしこれを一つのプロジェクトのなかで完全にまとめるのは、なかなかうまくゆかない。プロジェクトとなると、当然にも、方法論的にさまざまな問題がのしかかり、また処理しなければならない専門分野の蓄積も膨大になる。自然科学の場合、研究がどの方向へ向かうかという点では二つか三つの比較事例を用意すればよいことは明らかで、自然科学では、その大部分は実験による整理が中心になる。しかし我々はかなり違っていて、A と B がどのように機能しているかを見ればよいわけだ、などと言えば、まちがいなく手酷い目にあってしまう。すると評論家がこう尋ねました。〈たしかに、君たちは何をしようとしたのだ、A それとも B ？〉 実験やリスク準備が報われることは稀だった。だから私なら、ヨーロッパ・エスノロジーという〈ラベル〉について、単に内側から外側へ移ることを確かにするための試みと定義するだけにするだろう。なぜなら、言うまでもないことだが、研究のなかには長い時間的なスパンと関係し、自ずと比較にも延びていることがあるからだ。つまり、変遷、変化、連続性を問うという意味で比較になっているということでもある。また、地域と地域にまたがる比較もあれば、種々のグループあるいは村々が比較されることによって、一定のエリアのなかで比較がなされていることもある。しかしそうした場合、あまりに顕微鏡的という感覚もつきまとう。とは言え、歴史家や社会学者との交流のなかで我々が主張してきたの

は、決して偶然的・一回切りのものを探るのではなく、社会の特質にかかわるものを見きわめることだっただろう。またそこから、この20年ほどの間にやや荒っぽい決まり文句で言い表されたような姿勢ももとめられたのです。つまり〈皿の縁まで見逃すな〉というわけだが、皿の縁とは、ローカルなもの、小さなエリアのことを言っている。

ベルント=ユルゲン・ヴァルネッケン：我々がいつも二つのことを口にしてきたのは尤もだと思う。ネットワーク作りの必要性と、ネットワークのなかで、たいていは自分よりサイズの大きい、ときにはより大きなシンクタンクや理論（セオリー）タンクをもそなえた隣接の諸学を前に自分を主張しなければならない困難。この二つの問題は、その起源の一つがベルリンにさかのぼるところがある。つまり、ドイツ語圏のフォルクスクンデ（民俗学）が、組合組織と機関誌をそなえて機関化へと踏み出したのは、ここベルリンだったからだ。その機関化が実現する以前でも、ベルリンの民俗研究者たちは密接なネットワークをつくってはいた。もちろんそれ自体は悪いことではなかっただろう。つまりフィルヒョーが主宰した人類学・エスノロジー・先史学協会[46]だ。やがて彼らはそこから離れていったのだが、別のどこかに入ったわけでもなかった。ハイマン・シュタインタールがその『フォルクスクンデ組合誌』[47]の創刊号で彼らのために用意した道案内には見向きもしなかった。ジンメル[48]を読んでもらいたい。その道筋は代替として用意されたはずだったのだ。ところがエスノロジーの場合、国際的なディスクールの展開から遊離する度合いがひろがるばかりで、同時期に新たにできつつあった社会学への接続もみられなかった。またそれが、研究がもっぱら収集を意味し、並べることが評価に取って代わっていた以上、少しも欠損とは映らなかった。我々は、今も片足をその伝統の上に置いたままでいる。しかもその伝統が、重要な文化的な課題を満たしているということにもなっている。ポピュラーな人物の自伝やレコード・ジャケットやアイロンを蒐集したり、展示や大衆メディアに知識を提供したりだが、これは言い換えれば、文化史や文化人類学の専門知識を愛好家の知識へと橋渡しをすることであり、通訳の役割を果たしていると言ってよい。しかし諸々のディシプリンを横断し、その学問間の競合に耐えるような研究にはなり得ていず、成り得ても精々散発的で、それどころか学問研究と言えるものになっているかどうかも怪しい。これは、もちろん我々には満足できない蓋然性かつ現実なのだが、その思いは経緯を反復してみればつのる一方だ。しかし、ではどうすればよいのか。我々はマージナルな専門分野として、ドイツ、オーストリア、そしてスイスを併せてちょうど40人の教授ポストを擁していながら、伝統的に学問として弱点をかかえていることから抜け出せないでいる。私見では、我々が文化研究と社会研究の一部リーグでプレイできるとすれば、次のような場合ということになるだろうか。 a ）インスティトゥートの枠において力を結集すること、すなわち個々人がともすれば遠心的になるのを自制して、おおきな共通の研究企画へと結集すること、 b ）我々の弱点を他者の力と重ねあわせること、すなわちヨーロッパならびに

ヨーロッパ外のエスノロジーのなかで専門を同じくする者たちが協力すること、これはdgv（ドイツ民俗学会）[49]をフォルクスクンデとしてだけでなくエスノロジーとして（大文字で書ける）DGV の場にすることをも含むだろう。そしてまたナショナリティを横断するネットワークを強化し、それが教育と研究の日常のなかでも持続して現れることがもとめられる。それが推進されるのは、英語中心のインターネットでも、修正機能や翻訳機能があるわけだから、時間をあまりおかずにプログラム的な論考や書評を行ない、インターネット掲示板にも発信して行くということだろう。もちろんそれには第三者による経費負担や発信システムも要しはする。またこれとはやや違ったものとして、目下行なわれているような〈ヨーロッパ・エスノロジー〉を専門書店から刊行する企画など、あらゆる努力を排除すべきではなく、ドイツ語だけでなく、翻訳による発信も望まれる場合には、専門分野の内外に向けて発信してゆくことになるだろう。強固な態勢を現実のものとして構築する必要があるわけだが、それは専門分野のアイデンティティをさらに議論するとか、この分野に固有のテーマ観念やセオリーを他の分野にも押しつけるのではなく、核の部分をまとめるとともに、個々人の自由度を高めること、それには長期的なプロジェクトを役立てることが大事になる。同時にインターネットによる情報形成をも活用すべきで、それがまた内部を確かなものにすることにもつながると思う。

ペーター・ニーダーミュラー：国際化こそ新しいテーマを推進する唯一の道だと自分も考えています。ヨーロッパ・エスノロジーは国際的な専門分野でなければならず、またそれはドイツのエスノロジーとフランス・エスノロジーを寄せあつめたものではいけないのです。そもそもナショナルなエスノグラフィーがあり得るかどうか疑問です。ベルント=ユルゲンが指摘したように、インターナショナルな次元でプロジェクトを進めるには、新しいクオリティがもとめられます。

シュテファン・ベック：知識社会学のなかで少し前から議論されていることですが、知識生産の諸条件がどのように変化しているかという問題があります。そこでのテーゼの一つは、経済の動きは常に知識によって左右されること、また同時に、ペーター・ヴァインガルト[50]の説を引くなら、学問が、その組織やイニシアティヴをめぐって、産業と政治、それに社会的なスターたちに依存する度合いが強まっていることです。この問題は、僕たちがそれにどう対処するかをも含めて忽せにできないはずです。もし国際化とグローバリゼーションが進行するなかで僕たちの文化比較の能力がもとめられるとすれば、です。あるいは、むしろ、そうした能力がもとめられていないことも多いのでしょうけれど、そうであっても、です。と言うのは、すでに言いましたように、僕たちの専門分野は小さく、また人員構成の面からも強くはないのですが、インターネットや共同作業の可能性は、今現在そうであるよりもずっと開かれたものとして使えるはずなのです。これを僕自身は、ライフサイエンス（生命科学）の事例において実際に経験しました。ライフサイエンスに

関係する諸学は非常にグローバルかつ国際的な性格をもっており、それゆえ各地で文化的・社会的な差異に直面しています。したがって、資格のあり方においても、それにたずさわるだけの教育を受け能力をもった人々についても、大いに興味を惹くのです。と言うことは、ここには大きな展開の可能性があるのではないでしょうか。

ヴォルフガング・カシューバ：同じことを混ぜ返したくはないのだが、それには先ず、専門分野の構成と諸条件が整えられる必要があるだろう。他の幾つかの専門分野と比較すると、我々はほとんどゼロから出発したと言ってよい。国際的な学術振興のプログラムに我々がどの程度参加できているかを見るなら、たとえばDAAD（ドイツ学術交流会）[51]その他の客員教授についても、ほとんど枠を持っていない。それに対して、隣接学では同じ分野の同僚たちが顔を出すことができる。ネットワーキングでもそうであり、国際的な連携でもそれが現実です。彼らは、専門分野としてのインフラにおいて非常に多くの建材を使うことができる立場にある。のみならず、この数年あるいは数十年のあいだに、我々から失われたものもある位です。したがって、我々の専門分野において国際的あるいは学際的なコンタクトが成り立ちつつあることがどれほど意義多いかを、今、改めて根本的に確かめることがもとめられる。歴史家については、特にテーマとして挙げなくもよいでしょう。それは大変はっきりしているから。この20年を振り返るなら、そこで種々の専門分野が果たした役割の大きさには違いがある。と共に、学問構造と各専門分野のプレゼンスの程度にも差異がみられる。片や、我々は物質的なストックも、ストックになるようなシンボルも持ち合わせていない。一から構築しなければいけないわけだ。

ベルント=ユルゲン・ヴァルネッケン：〈構築〉と言うより、〈展開〉ではないだろうか。そこで、もう一度先ほどの問題なのだが、東ドイツのフォルクスクンデ（民俗学）と文化研究の遺産をどう評価するのか、またその遺産も今議論をしているパースペクティヴに寄与するところがあるのではないのか、これも問うてみたい。

レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ：たしかにそうすね。でも先ずは、ベルント=ユルゲンとヴォルフガングのお二人が話題に挙げられた専門分野のインフラとネットワーキングの可能性を続けてみたいと思います。特定の重点プロジェクトを企画し、それを参加者の資格論文の受け皿としても活用し、同時に指導する教師にも研究プロジェクトとして開かれたものとなるということ、それをどう見るかを検討するべきでしょう。一定の時間枠を設定して重点を発展させることによって私たちの、どちらかと言えば限られた資源をまとめるというのは、正にギーゼラの提案でもあります。それを通じて、ヨーロッパのさまざまな国で、プロジェクトへの参加者が現れるかもしれません。具体的なプロジェクトであるだけに、外国からのゲストを迎える可能性も好転するかもしれません。もっとも、同僚たちにとって、また私たちにとっても、テーマを設定して結びつけるのは難しいという印象をもってしまいもします。

ところで1990年以前のこの研究所の歴史にもどりますと、その年に、フォルクスクンデ（民俗学）とフェルカークンデ（民族学）を一つにする動きが起きたのでした。その共同作業は完全ではなかったのですが、諸問題と方法を、ヨーロッパというコンテクストにおいて、またヨーロッパ以外をもふくめてコンテクストにおいて比較の観点から認識し分析する基礎になったのです。

ヴォルフガング・カシューバ：特定のコンセプト、たとえば東ドイツのエスノグラフィーにおける文化と生活様式[52]、開かれたハイマートクンデ（郷土学）、あるいは西ドイツの文化研究、こうしたコンセプトを挙げる限りでは、平行線を引くことができると思う。たしかにそういう一面がある。しかし他面では、学問の組織形態の差異も加えなければならない。つまり比重の違いもあったことを率直に受け入れなければならないと思う。東ドイツの学問システムのなかでは、それほど認められてもいなかった比較的小さなアカデミズムの部門もあったわけだ。その一方、科学アカデミー[53]のなかにはかなり大きな分野で、以後もほとんど変化しないでいるものもある。その限りでは、多くのことを決定したのは、大議論でも論争でもなく、職業としての進路という次元だったとも言える。この点を、バランスシートのかたちに引いてみることも必要だろう。エスノグラフィーで言えば、東ドイツ全土でちょうど4つのポストが残され、ややあってそれらがこの研究所にまとめられたのだった。他のすべては、新しい組織に道を見出すことができず、まったく別の形にかえられていった。1990年から91年にかけての時期には、そうしたことがあっても、系統的な論議がなされなかった。我々自身もその経緯をほとんど系統的に顧みることなく過ぎしまい、わずかに『民俗学会誌』[54]に数篇の報告が載せられているにすぎない。

レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ：ヴォルフガング、貴方が今特殊事例で挙げられたのは、東ヨーロッパ全域にとって重要な問題でもあります。私の見るところでは、幾つかの異なった学問が共同作業をおこなう過程では個々の学問の物の見方がどのような役割をになうか、また天秤にどういう重みがかかり、どちらに傾くかが重要になってきます。その次にはじめて、幾つかのポストの一部が他より合理性にまさっていることになり、力をもつことになります。しかし現下の情勢は、東ヨーロッパで手がけられていた課題や問題について出口が見えない時点に来ているのです。違った理解がなされ、異なった研究条件の影響が残り、また重心の移動が起きています。ヨーロッパのこの東の地域とのコンタクトを忘れないために、そこでの学問のあり方について理解するようにつとめなければならないでしょう。

ヴォルフガング・カシューバ：西側の仕組みによって学問分野を組み替えるのが一つの行き方だろうね。これは何らかの分野に特定したものでもないは。科学アカデミーは政治的・イデオロギーなものとして解体されましたが、だからと言って個々の専門分野をも巻き込んだわけではなかった。むしろ、それにあたって諸々の学問分野が発言する余地が無

かったということだったろう。もっとも、質問は行なわれた。そうした機関が延命してよいのかどうかということだったのだが、答えは明白で、ノーだった。（旧東ドイツの態勢は）研究をめぐる我々の考え方とは両立できるものではなかったからだ。そこでのイデオロギーの内容については、何も言う必要はないと思う。その次になってはじめてエスノグラフィーが問われることになった。そこで起きたのは、大きな決定のいわば影の部分だった。つまり新しい組織形態の議論を行なうことができるよりも前に、ほぼ26人のポストをもっていたエスノグラフィー部門はすでに解体されていた。我々と話し合いをおこなうところまで残ったのは、その内のほんの数人のポストだけだった。しかも忘れてはならないのは、ベルリンの場合、専門分野の解体は、それでも次の唯一の結晶核になったことだ。ライプツィッヒ、ロストック、あるいはイェナで起きたこと、それは1991年から1992年にかけてだったが、それは話し合いなどまったくなかった。つまり二つのことがらが一緒にやって来たわけだ。一つは抹消で、東ドイツの学問史を組織的にも経営的にも終わらせてしまった。と同時に、西ドイツのシステムが入って来た。それにあたっては、どの面から見ても、専門分野のなかでの〈交替〉を議論するということでももはやなかった。たしかにそれはドイツの特殊事情だったかも知れない。他の国では、二つの学問が存在するという状況ではかったわけだから。ロシアもハンガリーもポーランドも。連想するとすれば、かつてのチェコスロヴァキアだろう。チェコとスロヴァキアでは、（チェコとスロヴァキアへの二分によって）学問も二つに分かれるという逆の動きが目下進行しているのだから。

ベルント=ユルゲン・ヴァルネッケン：転換の時期、自分自身も、ナイーヴに夢想していたところがあった。これから、ドイツのエスノグラフィーと文化研究の二つがたがいに競合と協力をすることになるだろう、と。またそのときには、東ドイツの学者と西ドイツの学者が、ときには西ドイツ地域で、ときには東ドイツ地域で一緒にフィールドワークをおこなうことになるだろうし、そこには中立国であるスイスのエスノ心理分析の研究者たちも指南役として加わるだろう、などとも想像していた。しかしまったくそうならなかっただけでなく、そもそも東ドイツの現在の社会は、エスノグラフィーの観察者をほとんどもっていなかったとも言える。まもなくここでは空白が50年になろうとしている。東ドイツ時代には、現在の日常はほとんど調査されなかったと言ってもよい。ヴォルフガング・ヤコバイト[55]の日常史研究があるが、ヤコバイトはそれを1910年で終わりにしている。ミュールベルクによる労働者文化のプロジェクトもせいぜい1920年代までであり、マグデブルク沃野調査プロジェクトは1961年を超えてはいない。つまり、〈農業における社会主義的生産関係の勝利〉までなのだ。ちなみにこれについては、イェナのクリステル・ケーレ=ヘーツィンガー[56]がマグデブルク沃野調査のプロジェクトをもう一度取り上げて、時間的に延ばそうとしているのは嬉しいニュースと言えると思う。また、ウーテ・

モールマン[57]が早くから現代民俗学の姿勢を見せていたのも事実だが、それは小さな部分領域、特に祭り文化に限られ、しかも印刷されたものは極くわずかにとどまった。東ドイツの日常生活の多くは、国家機密であったかのようだ。はっきり思い出すのは、ディーター・シュトリュッツェル[58]が継続しておこなっていたイェナにおける余暇をめぐる規模の大きなアンケート調査だが、しかしそれは文書にまではまとめられなかった。それゆえ印刷で見ることができなかった。あるいはまた、これまた思い出すのだが、1980年代の初めにヴォルフガング・ヘルツベルク[59]がベルリンでの戦争末期の様子について体験者にインタヴューをおこなったとき、どんな問題に直面したかということもある。そのテーマの場合、赤軍に属する兵士たちがおこなった集団的な暴力行為については極力書かないことがもとめられたのは当然だったろう。そのとき、我々がほんのわずかだったが、ヘルツベルクを支援したのを覚えている。しかしその頃、我々も労働者の運動となると、第二次世界大戦後や今日の時代よりも、初期の（主に19世紀のいわば）英雄時代をより多く研究していたのだった。だから、東西ドイツに共通して、時間的に空白があるわけだ。

ヴォルフガング・カシューバ：両者が交流するようになったのは、東ドイツと西ドイツ両者ともに社会批判の視点をもち、それが歴史とむすびついたときからだった。その頃は、わりあい簡単に考えてもいた。と言うのは、現今も現今の学問のあり方も欄外に放置していたからだった。ともあれ、実に不思議な出会いだった。そして再び言葉を交わしたのだった。やや批判的なコメントをこめてね。お気の毒です。こうなるとは思っていなかったのですが ―― それが東と西の出会いにおける儀式だった。学問的な作業の諸条件は外においていたのだった。ディートリヒ・ミュールベルクは、その点で最も開放的で最も心の広い人物の一人だった。彼は、東西それぞれで何が望ましかった、何が望ましくなかったかを、そう永くは語ろうとはしなかった。我々もまた、西ドイツの学術支援が何を可能にし、逆に何を不可能にしたのかについて非難をしなかった。会合は、歴史によって、資本主義批判によって演出された部屋で行なわれた。1989/90年以後のドイツの推移が、そうした部屋の床の一部をはぎ取ってしまったことは言うまでもない。

レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ：貴方がたお二人が話されたのは二つの路線ですね。一方には、東ドイツ研究における相当強力な歴史への方向付け、そして1980年代の重点移動。現今に方向をつけて疑問を呈するそうした姿勢は、テュービンゲン大学のコンテクスト、ならびに特にフランクフルト大学のコンテクストにおいても期せずして起きたのでした。ベルリン大学のインスティトゥートの場合、当時はエスノグラフィーを掲げていましたが、そうした疑問の立て方は、教育・研究、そして卒業研究においても、1980年代からとみに強まってゆきました。東ドイツのなかで現代研究が可能になった諸条件のなかにその基礎をもったわけです。それは決して幅広いフィールドではなく、1990年代の新しい諸条件のもとで自動的に両立するようなものではなかったのですが。

（東ドイツの）科学アカデミーが、まったく異なった生産的な分野をもっていたとの認識については、本質的に意見を異にするのでありません。ただ西ドイツの学術風土を見ると、マックス・プランク研究所[60]やその他の研究機関では、1990年以降におこなわれたものをも併せてみると、これまた当初は教育的な課題ではなかったのです。むしろ1990年代の結果なのです。学術面に振り向ける経費が削減されるとともに、純然たる学術的な研究所、これには青色リスト研究所[61]やマックス・プランク研究所などもそうですが、教育課題として認識すべきとの圧迫が強まりました。1999年に私たちが地域振興・構造計画インスティトゥート（IRS）[62]と結んだ共同作業の協定を考えればよいでしょう。そこでは、関係する研究者が、定期的に私たちの大学で教育活動を行なうべきことが盛り込まれました。

アカデミー・インスティトゥートと関係者をめぐる問題とは、課題や問題やテーマが独自の接続の意図をもっていた分野はおそらく比較的小さかったという点にあったのです。しかしこの全体の破局のなかで、誰も彼もが解体に呑みこまれたのです。老いも若きも、男も女も、そして、新しい状況のなかで地平を変えたり広げたりする能力や意図の如何も顧慮されなかったのです。

ヴォルフガング・カシューバ：もう一度、大きな枠組みに目を向ける必要があると思う。IRS あるいは他の機関が作られたのは、社会学者が中心となったかなり強い圧力によってだった。いずれも、かなり大きな専門分野だった。もし1990年に焦点を当ててフラッシュ撮影をしたとすれば、研究・教育の分野で民俗研究者は100人も映ってはいないだろう。そんな小さな集団なのだ。その代わり、圧迫の程度も小さかった。実は西ドイツでも、大状況では似たようなものだった。言うまでもないことながら、（西ドイツの）ドイツ民俗学会や民俗研究の個々の領域が圧力をかけたわけでない。そこではこんなことが言われていたものだ。〈移行への道筋が必要だ〉。社会学者たちはそれを行なっていた。歴史家たちもそうしていた。それに沿って、青色リスト研究所やその他の受け入れポストが設立された。あるいは WIP プログラム[63]もそうで、数百人から数千人のポストを持っていた。事態を端的に分からせてくれる指標を挙げるなら、フォルクスクンデはその内の0.4％なんだね。これは我々がおかれている実情とも対応している。大学図書館の予算に占めるフォルクスクンデの比率が0.3％となっている。他面では、学問の地平やパースペクティヴについて議論が起きたのではなく、人員をめぐって、また個々人の次元での議論だった。ではその人員については何が起きたか。政治的関係による学問の平面での破局は、最終的には、取り組むプログラムについて起きたわけだ。10年が経過するなかで（東ドイツの）科学アカデミー世代は退職していったため、プログラムが乖離する他なかった。

おわりに

シュテファン・ベック：そろそろ締めくくらないといけないので、お聞きしますが、将来たどらなければいけない緊要の路線とは何でしょうか。皆さんの心のなかで最も燃えているのは何でしょうか。

ペーター・ニーダーミュラー：密度の高い研究プロジェクトに取り組み、領域においても課題設定においても、この専門分野を国際化することがもとめられます。そしてまた共通の理論的な方向をさぐるのも大事なことです。

ベルント=ユルゲン・ヴァルネッケン：ヴォルフガングが語ってくれたタンカーとカヌーの喩えを延ばしてみたい。この専門分野の改革の後、我々が一番気に入った船は、急流用のカヌーだった。一人あるいは小グループで、絶えず新しい水路をさぐり、常に新たな土地を発見し、流行の流れにすばやく身をゆだねる、これ自体は大変大きな意味を持っている。しかし急流用のカヌーからゴンドラに変わることが必要な度合いも高まっている。ゴンドラもまた決まった船着き場をたどっているわけではないのだが、それが行き来するのは運河なのだ。しかも水路はだんだん狭くなってくる。と共に、どの方向にも大きな開けた空間が見えてくる。そうしてゴンドラは進んでゆき、遂に、自分は広くも厚くもならないものの、記述は厚くなる。つまり長期的なプロジェクト、目指すものを一言で表せば、そうなると思う。

ギーゼラ・ヴェルツ：絶えざる反省と省察をどのようにして行なうのか、やはりこれを考えるべきでしょう。そしてエスノグラフィーに立った研究とフィールドワークの存在価値を問うということです。それも今この時点において。つまり生活世界におけるグローバリゼーションやモビリティ[64]や科学技術の進展、また生活世界への専門知識の導入[65]といった変化に直面している今だからこそ、フィールドワークをどう定義するのかが問われるのです。それは私たちにとって何なのでしょうか。長期的でなければいけないのか、定点的でなければいけないのか。また（多文化的な）居合わせ[66]や（人々の）日常活動も問われるべきでしょう。となると、日常とは、という問いも起きてきます。労働なのか知の生産なのか。そこで次には、これら対して新しいガイドラインを考えることがもとめられるでしょう。

ヴォルフガング・カシューバ：ゴンドラの喩えは実によかった。たちまちヴェニスを連想させてくれる。早速ヴェニスの水路をゴンドラでたどってみてもよいわけだが、しかし専門分野を論じるとなると、むしろカヌーをもとに、大海原に耐えるカタマラン艇を作ってみようともおもう。この（二つのカヤックをくっつけた）小舟もまたカヌーとしても使うことができる。

国際化、それは当然だろうね。しかし流行だからではなく、それが事実だからであり、

また力を合わせることだからだ。加えて国際化が、ヨーロッパの地平へと延びて行くコミュニケーションだからであり、さらにそれをも超え出るコミュニケーションだからだ。これが、ヨーロッパ・エスノロジーの探索行動の一部でもある。それと並んで、なお影響力を発揮するはずの二つの重要なことがらがある。一つは、機関組織化と専門構造、つまりこれは持続的な理解と存続の形態なのだから、これについてはさらに踏み込んで検討する必要がある。たとえば、好奇心をそそられる一つに、他の諸分野と対比して、我々の教授活動の負担と研究へのキャパシティの実態調査がある。つまり、多くの点でやはりオーバーワークではないかという私自身の印象が正しいのかどうかを確かめてみたい。研究所の活動には多額のコストを要する部分があるのだが、これらのコストが、それまた国際化を視野におくとマイナスに影響していることが少なくない。出張の回数が少なく、研究が制約され、新しい試みに取り組む可能性が狭められている。外部のゲストへの待遇も悪くならざるを得ないといったこと。

二つ目に、このカタマラン艇をときどき他の船舶と共通の整備場へ持って行くことになるが、そこでは社交だけでなく、幾つかのポジションを交換することになる。何が要りようなのか、共通の行く先はどこで、追いかけて一緒に行くべきかどうか。実際、研究の自由について決まりもあるのだが、これまた一方では個々人の任意にゆだねるとしながら、他方では規準を設けており、研究にもコルセットがはまっている。両方ともマイナスだ。そしてなおバランスを見出すにはいたっていない。偶然に左右されることもある。これからの10年を考えると、何が適切かの選択を期待できるようなやチャンスはもはやそう多くないのでは、との危惧をいだいている。これをかなりのスピードで、また自力で調整しなければならないわけだ。幾つかのタンカーにはさまれながらカヌーを操り、他の大型船と共同で作業しなければならず、そうでなければ押し潰されてしまう……。

レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ：有難うございました。座談会を実現させていただきましたことに深く感謝いたします。

訳　注

1）**ヨーロッパ・エスノロジー協会**（Gesellschaft für Ethnologie e.V 略称 GfE）の**設立10周年**の節目：この名称を掲げて研究組織が発足した経緯は、先ず1990年4月21日に当時の東ベルリンの国立博物館の文化ホールにおいてであり、イニシアティヴをとったのは東ドイツの民俗学（Volkskunde）と民族学（Völkerkunde）の研究者たちであった。公式には1990年6月26日にベルリン市の認可受けた。人員面ではベルリン（フムボルト）大学の民俗学科であるヨーロッパ・エスノロジー学科と組になった研究者組織の性格をもっている。1992年度夏学期から、テュービンゲン大学教授であったヴォルフガング・カシューバがベルリン大学ヨーロッパ・エスノロジー研究科の主任教授として赴任したことによって今日に至る態勢への軌道が敷かれた。

2）**文化研究**（Kulturwissenschaft）：日本でいう人文科学が指されていると見ると分かりやすい。なお日本の人文科学にあたる表現では、他に精神科学（Geisteswissenschaft, -en）があり（p. 93ギーゼラ・ヴェルツの発言にこの語が現れる）、どちらも社会科学（Sozialwissenschaft, -en）と対比的である。この座談

会では、フォルクスクンデおよびその後進でもある今日のヨーロッパ・エスノロジーが人文科学か社会科学かが中心的なの論点の一つとなっている。文化を研究対象とするのは人文科学、社会を研究対象とするのが社会科学という基本的な対比を念頭においておくと理解しやすい。

3）**問題直視**（Problemsichten）：現代ドイツの流行語。特に地方公共団体のレベルで、地域政策にさいして問題点を特定すること、という意味でよく使われる。この語をカシューバは普通に用いたのであろうが、この後、ニーダーミュラーとにベックはそれぞれの最初の発言のなかで、〈問題直視と課題設定〉と言っても、いかなる視点から行なうかについて共通の土台が確立されていない状況では、その前段階が問題になる、とコメントする。特にベックはその観点からギアツの〈厚い記述〉に言及する。

4）**統合**（Desintegration）……**反統合**（Desintegration）：国民的なまとまりなど、一般に文化は統合に作用すると先ず考えられているが、ＥＵの進展や、ＥＵの内部の多文化化などのなかで、文化による結集が、まとまりをただちに促進するのではなく、分裂をうながす作用の面もある、といった指摘のようである。

5）**民**（フォルク）**というキイワード**：“Volk” はドイツ人にとっては、ドイツ人全体を漠然と一体のものとして指し、内容が明瞭でもないにもかかわらず実感のつよい語である。それゆえ、〈フォルク〉というだけで、何か一体的なものを思い浮かべ、またそうした心理に人をさそうことになる、ことへの警戒は、戦後のドイツ民俗学の最初にして、また一貫した反省点となっている。

6）**1960年代以来……フォルクスクンデ**（民俗学）や**自省的な文化研究をめぐって思いわずらい勝ちな者**：ドイツ民俗学は戦後まもなくから、ナチス・ドイツとの相関の過去を問われて専門分野としての正統性の危機に見舞われたが、学界内部で方法論の反省が深まったのは1960年代であった。そこではロマン主義のなかで形成された民俗学の存立基盤を自ら否定する議論にまで進んだため、身内の悪口を言い立てるとして〈我が巣をよごす者〉（Nestbeschmutzer）として反撥や牽制の声も挙がった。

7）**経験型文化研究**（empirische Kulturwissenschaft）：テュービンゲン大学の民俗学科がヘルマン・バウジンガーの主宰の下でこの名称を掲げてきた。学科名と共に、その教員・研究者組織であるはルートヴィヒ・ウーラント研究所（Ludwig Uhland Institut für empirische Kulturwissenschaft）がこの学問名称をかんすることになった（ただしルートヴィヒ・ウーラント研究所自体は、ナチス・ドイツ時代にまで遡る歴史をもってい）。名称の基本概念としては、〈経験〉すなわち実地調査を組み込んだ研究姿勢と、研究対象が〈文化〉であることが意味されている。

8）**個別事象**あるいは**自己心情**（das Partikulare oder der Eigensinn）：ここで言い換えとして言及される “Eigensinn” は一般語としては強情や我意を指すが、特定の集団に共有される歪みをもった物の見方を指すためにディートリヒ・ミュールベルク（後注）が労働者文化の研究でもちいた語用を踏まえている。

9）**他者区分**（Othering）：個体、また多くは何らかの集団の一方を自己と同一と見、他方を他者（other）と見る区分で、古くは古代ギリシア人が自己をヘレネス、周辺の他民族をバルバロイに二分したことにも遡る。歴史を通じて常に多彩に見られた社会的観点であるが、ここでは、特に1970年代からのミシェル・フーコー、フランクフルト学派、さらにエドワード・サイードなどポストモダニストの議論を指している。サイードが著作『オリエンタリズム』（Edward Said, *Orientalism*. 1978）のなかでニーチェを踏まえつつ考察したことも指標的である。

10）**退行**（Regression）：もとは心理学用語で、成長過程における後ずさり現象を指すが、社会現象を指す学術用語としてヘルマン・バウジンガーによって民俗研究に導入された。懐旧志向・レトロ志向、社会の新たな動きへの反発などの形として現れる。

11）**テュービンゲン大学の大会では……アイデンティティを見出すには〈フォルクスクンデ〉の名称に立ち戻るべきとの声が挙がったこと**：テュービンゲン大学のグループが伝統的な名称に留意しているのは、それがマイナス面も含めて専門分野の人と知識をまとめる伝統的な枠組みであったことを逆用する視点によっており、それゆえ代表的な幾つかの伝統的なキイワードを敢えて採用するのは緊張とイロニーを伴う営為と自認されている。ニーダーミュラーはハンガリーで民俗研究をおこなったため、その事情を踏まえていないようであるが、またドイツ学界の核になる世代でもテュービンゲン大学の研究上のストラテジーが理解されていないことには注目しておきたい。

12）**規範**（Kanon）：ドイツ民俗学界で批判的な意味で使われることが多いキイワード。民俗学の研究領

域や個別部門として、従来、儀礼と行事の他、家屋、民俗衣装、歌謡、昔話、部族気質といった区分が大きな意味をもち、またそれらに沿って研究者の配置が行われていた。1960年代にヘルマン・バウジンガーが、そうした整った抽斗を前提した個別研究の前提に方法論的な疑問を投げかけ、たとえば昔話にも住宅民俗にも共通の歴史的あるいは現代の動向を先ず考察する必要があると説いた。

13）**ヴォルフガング……近著**：〈ヨーロッパ・エスノロジー〉をタイトルに掲げた次の著作を指す。Wolfgang Kaschuba, *Einführung in die Europäischen Ethnologie*. München 1999, (2)2003.

14）**比較**（研究 Vergleich）、**歴史化**（歴史学への志向 Historisierung）、**人類学化**（Anthropolgisierung）：このうち歴史化は、バウジンガーの意味での一般の趨勢としての歴史志向ではなく、ヨーロッパ・エスノロジーが特に近・現代史の対象・関心を共にすること、たとえばナチズムや東欧の戦後史の評価などに向かうことを指しているようである。〈人類学化〉は文化人類学の近年の動向をも有機的に射程に入れた研究姿勢ということであろう。

15）**厚い記述**（dichte Beschreibung）：英語の原語は “thick description” で、元はイギリスの哲学者・言語学者ギルバート・ライル（Gilbert Ryle 1900–76）の概念で、その後アメリカ合衆国の文化人類学者クリフォード・ギアツ（後注）が1973年の著作『文化の解釈学』の中の「厚い記述：文化の解釈学的理論をめざして」において（Clifford Geertz, *Thick Descretion: Toward an Interpretative Theory of Culture*. In: Ders, *The Interpretation of Cultures. Selected Essays*. New York 1973）方法論として敷衍したことによて一般化した。何らかの事象について項目や当該現象だけを挙げるのが〈薄い記述〉であるのに対して、文脈・脈絡を書き込むことを指し、文化人類学がまもるべき表出方法とされた。ライルはまばたきを例にとって、それが無意識の瞼のまたたきであるのか、友人に悪だくみの合図を送っているのかは、現象的には（たとえばカメラでは）とらえ切れないが、遺漏なく把握することが厚い記述であると説明している。

16）**ディートリヒ・ミュールベルク**（Dietrich Mühlberg 19. Feb. 1936–L）：ベルリン出身の文化史家。東ドイツ時代の代表的な歴史家の一人で、特に労働者文化を中心に幅広いテーマを扱った。ジャーナリストとしても活躍をつづけてきた。

17）**地方を称える太鼓**バグパイプ（Dudelsack）であれ**下層民衆信奉の笛**：笛や太鼓で……といった感じの表現で、原語はバグパイプ（Dudelsack）とシャルマイ（Schalmei チャルメラのような管楽器）。

18）**メソッドのミックス**（Methodenmix）：1990年代からマーケット調査などで、前代（主に1970年頃から）に盛んになった量的調査方法の限界から、質的方法を組み合わせることが追求され、当初は、中間メソッド（Between-Methods）などの術語が現れ、やがてメソッド・ミックスという言い方が多く使われるようになった。特にアメリカの産業社会学者ノーマン・K．デンジン（Norman Kent Denzin 1941–L イリノイ大学教授）の刺激が大きい。

19）**ディスクール分析**（Diskuranalyse 言説分析）：事象や社会や機構の構造や意味は、それが表現される言語の位相とコミュニケーションにおける言語媒体の特殊性をふくめて考察することがもとめられるとする方法論で、今日この概念がもちいられるのはミシェル・フーコー（Michel Foucalt 1926–84）が1970年代に提唱した理論を踏まえていることが多い。テクスト・リングイスティクス（Text linguistics）の方法を社会全体に応用したと面もある。

20）**節度**（Kontingenz）：一般語としては自制や禁欲を指すが、現代の学術用語としては、特にニクラス・ルーマン（Niklas Luhmann 1927–98）の用語として知られている。社会や世界に対して、絶対知を以て臨むのではなく、他の可能性に向けて開かれた姿勢をとることを指し、それゆえコミュニケーション行動における決断でもある。

21）**アグネス・ヘラー**（Agnes Heller 1929–L）：ハンガリーの女性哲学者。ユダヤ人。父親はナチス・ドイツの犠牲となった。母親とともに生き延び、戦後、ブダペスト大学でジェルジ・ルカーチの講義を聞いて哲学に進み、1955年に学位を得、やがてルカーチの助手となった。社会主義のハンガリーで抑圧され、1977年にオースとラリアへ移住し、のちにメルボルン（La Trobe University 1978–83）で教授となり、次いでニューヨーク（New School for Social Reserch 1986から）でハンナ・アーレントの後任として社会学の教授となった。

22）**ベルリン地域……プロジェクト**：東西ドイツの統一直後にヴォルフガング・カシューバとウーテ・モールマン（東ドイツ時代からベルリン大学民俗学科教授）が大学院生をも参加させておこなった東西

研究を指す。参照, *Blick-Wechsel Ost-West: Beobachtugen zur Alltagskultur in Ost- und Westdeutschland* [Leitung von Wolfgang Kaschuba und Ute Mohrmann]. Tübingen 1992 (Tübinger Vereinigung für Volkskunde).

23）**キービンゲン**（Kiebingen）：キービンゲンはテュービンゲン市内に位置するプロテスタント系の村落。中世以後の村方文書が多く保存されているため、民俗学のなかでは歴史的研究の地域として注目されたが、それを踏まえつつ1980年代にテュービンゲン大学の民俗学の教授ウッツ・イェクレが博士課程の学生たちを引率して定置観測・参与観察のフィールドワークを行なった。その際、参与観察者が単に観察者にとどまらず、外部からの刺激因子として活動し、それへの住民の反応を併せて記録するという手法を実行したことにより、方法論として賛否両論の反応が起きた。

24）**インクルージョン**（包括 Inklusion）と**エクスクルージョン**（排除 Exklusion）：一般語であるが、この文脈では教育学や社会学における現代の語用が踏まえられている。何らかの障害をもつ者やマジョリティとは異なる人種・民族・宗教などのものを含めて行なう教育をインクルージョン（包括）教育と言う。この文脈では排除はほとんど場合マイナスの意味で使われるが、歴史学の広義の意味では、特定の時代の仕組みを指すことがある。

25）**イノヴェーション**（刷新）：社会的イノヴェーションは経済学者ヨーゼフ・シュムペーターの用語で、その『経済発展の理論』(Josepf Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. 1912）の重要概念として定着した。また生物学・生化学では動植物の発育促進を指し、それが社会科学にフィードバックしたこともある。日本では通産省の白書で〈技術革新〉の訳語があてられたことがある。ここでは伝統と対比して用いられており、その構図ではヘルマン・バウジンガーの論説があるが、特定の学説と関係づけるほどの必要はなさそうである。

26）**連続性**（Kontinuität）：ドイツ民俗学では、もとは民俗文化の連続性、とりわけゲルマン連続性という前代の悪しき仮説ないしは固定観念を指す。それを多少とも踏まえているために、その語用は比喩的・意識的な性格を帯る。

27）**儀礼と行事**（Sitte und Brauch）：慣行と習俗とも訳され、民俗学の重要な研究対象である民間習俗と祭り行事などを指す言葉であるが、広義では民俗学の対象のほぼすべてを指すこともある。民間での実際の語彙使用では〈ジッテ〉と〈ブラウホ〉のどちらか一方だけであったり、両者の意味が逆になっていることもある。伝統的な民俗学の標準的な理解では、ジッテは民間習俗・行事の奥にある法則的な規準、ブラウホは個別現象を指す。1960年代からの改革志向においては、これらがキイワードとなっていること自体が疑問とされるようになった。

28）**マックス・ウェーバー**（Max Weber 1854–1920）：エルフルト（テューリンゲン州）に生れ、ミュンヒェンに没した社会学者。フライブルク大学教授、ハイデルベルク大学教授。経済事象を宗教との関連で解明を試みたほか、権力の類型学としてカリスマの概念を措定し、また学問的認識の方法論についても考察を行なった。

29）**クリフォード・ギアツ**（Clifford Geertz 1926–2006）：アメリカの文化人類学者、サンフランシスコに生まれ、ハーヴァード大学で社会人類学を専攻した。プリンストン高等研究所の社会科学教授（1970–90）。マックス・ウェーバー（Max Weber 1864–1920）、タルコット・パーソンズ（Talcott Parsons 1902–79）、アルフレート・シュッツ（Alfred Schütz 1899–1959）などの再検討を踏まえたその学問は、象徴解釈学的人類学や意味論的人類学と呼ばれ、広く社会科学にまたがる問題の考察を含んでいる。

30）**ライティング・カルチャーをめぐるディベイト**（Writing culture debatte）：アメリカの文化人類学において起きた民族誌のあり方をめぐる変革の議論を指す。民族誌は、経験を積んだ観察者が特定の社会集団を対象にして〈慣習を観察して記述し解釈するという単純なものではもはやありえず〉、むしろ〈最も単純な文化の説明でさえ意図的な創造であり、解説者は自分が研究する他者を通じて絶え間なく自己自身を形成する〉という解釈学の系譜に立って、民族誌の作成とは一種の “art” であり、そこでは詩学・修辞学が、認識論的な観点と共に本質的な関わり方をもつとされる。参照, James Clifford, George E. Marcus, Mike Fortun, Kim Fortun (Ed.), *Writing cultre – the poetics and politics of ethnogoraphy: a school of American Research advanced seminar*. Berkeley [University of California Press]1986. [邦訳] ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス（編）春日直樹（他・訳）『文化を書く』紀伊国屋書店 1996.

31）**労働者文化**（Arbeiterkultur）：民俗学のなかでは、1960年頃から、西ドイツではマールブルク大学とテュービンゲン大学、そして社会主義を国家原理する東ドイツで盛んになった研究部門。歴史学の民衆

史研究とも重なるが、必ずしも共同作業がなされたわけではない。広義では農民研究をも含むが、狭義では工場労働者が対象とされた点で、伝統的な農民研究から制約を突破する可能性を持った。また20世紀末からは、従来、労働者文化の枠組みでは、被抑圧者、あるいは中・下層の労働者が対象であったのに対して、幹部労働者や管理職にも研究が広がる動きが現れた。

32）**マグデブルク沃野**（Magdeburger Börde ベルデ）：原文は〈沃野〉と表記されているだけであるが、東ドイツの民俗学の代表的な成果の一つである「マグデブルク沃野総合調査」を指している。東ドイツの民俗研究の代表的なものの一つで、資本主義時代における変化を総合的に明らかにすることが目指された。成果の一つにハイナー・プラウルの著作『19世紀の農業労働者の生活』（Hainer Plaul, *Landarbeiterleben im 19. Jahrhundert*. Berlin 1979）がある。

33）**イーナ＝マリーア・グレヴェルス**（Ina-Maria Greverus 1929–L）：ザクセン州ツヴィッカウ出身の女性。マールブルク大学で学び、フランクフルト大学の民俗学科を主宰し、特に外国人問題や多文化社会との取り組みを民俗学の分野に導入し、その方向でのパイオニアであった。基礎となった理論的な成果には、『テリトリー（縄張り）的存在としての人間』（*Der territoriale Mensch*. Frankfurt/M 1972）がある。

34）**ユルゲン・コッカ**（Jürgen Kocka 1941–L）……**この本**：Haindorf（現チェコ Hejnice）出身のドイツの社会史家。ビーレフェルト大学教授（1973–88）、後、ベルリン自由大学教授（1988–2009）、専門はドイツ近・現代史で、ハンス＝ウルリッヒ・ヴェーラー（Hans-Ulrich Wehler 1931–L, Uiv. Bielefeld 1971–96）とともに歴史学的社会科学をめざし、ビーレフェルト学派とも称される。なおここで言及されるのはユルゲン・コッカがまとめて2000年に刊行された次の編著を指すようである。*Geschichte und Zukunft der Arbeit*, hrsg. von Jürgen Kocka und Claus Offe unter Mitarbeit von Beate Redslob. Frankfurt [Campus Verlag] 2000.

35）**SIEF**（Sociéte Internationale d‘Ethnologie et de Folklore）：インターナショナル・エスノロジー・フォークロア協会。前身は1929年に創立され、戦争を挟んで断続的に活動をしていた民俗工藝に重点をおいた CIAP（＝ Commission Internationale des Arts et Traditions Populaires）で、1964年のアテネ大会で紛糾が頂点に達したために、同年に先ずその内部機関として発足し、その後、母体を引き継いだ。1971年からヨーロッパ諸都市で数年おきに大会が開かれている。

36）**EASA**（European Association of Social Anthropologists）：ヨーロッパ社会人類学協会。ヨーロッパ社会人類学協会。1989年にローマの南東のアルバーノ湖に面した小都市カステル・ガンドルフォでヨーロッパ13カ国からの21人の社会人類学の専門家によって結成された。1990年からは隔年でヨーロッパの諸都市で大会が開かれている。

37）**言語論的転回**（linguistic turn）：言語が事物や事象を伝達する透明な媒体ではありえないとの観点は古くヴィルヘルム・フォン・フムボルト（Wilhelm von Humboldt 1767–1835）、またルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン（Ludwig Josef Johann Wittgenstein 1989–1951）においても考察されていたが、ここで言われるのは1970 年代に、哲学だけでなく、構造主義に立つ主にフランスの文化人類学を含む人文系の諸学が、構造化の動因としての言語の重みを認識したこと、またそこではフェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure 1857–1913）への注目が大きな要素であったことを指す。ミシェル・フーコー（Michel Faucault 1926–84）、ジャック・ラカン（Jacques-Marie-Emile Lacan 1901–81）、ジャック・デリダ（Jacques Derrida 1930–2004）などが有力な論者であった。これらに先立って分析哲学の系譜における言語媒体問題の諸論考を1967年にリチャード・ローティ（Richard Rorty 1931–2007）が *“Linguistic Turn. Recnet Essays in Philosophical Method”* のタイトルで刊行したことによって一般化して、構造主義者たちの作業がうながされた。

38）**近代化の挽回**（nachholende Modernisierung）：1989年の東ドイツの崩壊と東西ドイツの統一において浮上したキーワード。東ドイツが実質的には西ドイツに併合され、そこで起きた急激な社会変化を、妨げられていた近代化を取りもどすことと解する可否をめぐって多方面の議論となった。

39）**独裁の比較**（Diktaturenvergleich）：冷戦時代、とりわけソ連のスターリン批判後、ドイツで繰り返されたヒトラーのナチス・ドイツとスターリン独裁下ソ連の比較で、二つの独裁を等価と見ることができるか等の基本的な視点をはじめ多くの論点が含まれる。本座談会の後も、1939年 8 月24日にモスクワにおいて独ソ相互不可侵条約が結ばれてから70年後の節目を機に、2010年前後に改めて議論となった。

40）**ナショナリズムの挽回**（nachholender Nationalismus）：東欧各国では社会主義の原理の下で二次的で

あったナショナリズムの要素が、ソ連の崩壊と社会主義の放棄の後、民族や地域のナショナリズムの視点において擡頭し、またそれが正当性をもつような受けとめ方がされたことを指す。

41）**植民地主義的なモデル……近代化のコンセプト**：現代の流動性の高まりによってヨーロッパが狭くなる一方という議論とのかかわりで、ナショナリズムや近代化がヨーロッパのなかで起きることは、現実にはヨーロッパの政治・経済力の対外的主張、またヨーロッパ域内では非ヨーロッパ出自の外来者への規制につながりかねない、というカシューバの見解が背景になってなされた発言のようである。

42）目下**チェコ人は彼らの新たな国民史を書いている**……：第一次大戦の終結以来、チェコに相当するベーメン（ボヘミア）とスロヴァキアにあたるメーレン（モラヴィア）はチェコスロヴァキアとして一つの国をつくり、その枠組みは社会主義の下でも継続していた。両地域が、チェコとスロヴァキアに分かれてそれぞれが国となったために、国民史の書きなおしの機運が起きた。

43）**ハンガリー国民**が彼らの**昔の国王たち**：ハンガリーは伝統的にはカトリック教会圏であったが、第二次世界大戦後は社会主義国としてソ連圏の影響下に入ったため、戦後間もなくの時期には処刑された司教もあったほど、伝統が抑圧された。東欧の社会主義の放棄の後、国民的なアイデンティティの拠りどころとして、ハンガリーのキリスト教化に踏み切った初代国王で聖人でもあるイシュトヴァーン１世（István I. 969 or 975–1038 国王在位997–1038）を頂点として、歴史的に輝かしい事蹟の国王たちへの敬慕の波が高まった。

44）**アンティセミティズム**（Antisemitismus）：セム人すなわちユダヤ人を排斥する考え方や行動。

45）**複合社会におけるヨーロッパ・エスノロジー**：原語は “Europäische Ethnologie in / von komplexen Gesellschaften: theoretisch-methodische Vorgehensweisen”、従って〈複合社会のなかの（及び複合社会ををめぐる）ヨーロッパ・エスノロジー……〉の意。

46）**フィルヒョー**（Rudolf Ludwig Karl Virchow 1821–1902）が主宰した**人類学・エスノロジー・先史学協会**（Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte）：ルードルフ・フィルヒョー（or ウィルヒョー）は白血病の発見者と知られる、ベルリン大学教授の病理学者。学界の大立者として政治にもかかわり、晩年は保守的な権威者となったとも言われる。種々の新分野に関心を寄せ、先史学をも手がけて、その分野の弟子にあたるアードルフ・バスティアン（Adolf Bastian 1826–1905）と共に1869年にベルリンで人類学・エスノロジー・先史学協会を設立した。

47）**ハイマン・シュタインタール**（Heymann Steinthal 1823–99）……『**フォルクスクンデ組合誌**』（Zeitschrift des Vereins für Volkskunde）：シュタインタールはベルリン大学教授、一般言語学を担当した。スイスのベルン大学の心理学教授となるモーリッツ・ラーツァルス（Moritz Lazarus 1824–1903）が同大学講師の頃に、共同で1860年に『民族心理学と言語学のための定期誌』（Zeitschrift für Völkerpscychcologie und Sprachwissenschaft）を刊行した。二人は共にユダヤ人。この定期誌を引き継いだのが、ドイツ全土にまたがるドイツ民俗学会の機関誌の位置にある性格にある『民俗学（組合）誌』で、カール・ヴァインホルトによって1891年に創刊された。その際シュタインタールは、後者の第一号（1891年）に、二つの機関誌の接続のために今後の進み方について期待をこめた一文を載せた。なお 後注の『民俗学会誌』を参照。

48）**ジンメル**（Georg Simmel 1858–1918）：ベルリンに生まれ、ストラスブールで没した社会学者。ユダヤ人でキリスト教に改宗した家系。ベルリン大学に学び、同大学講師の後、晩年にシュトラースブルク大学の哲学教授。

49）**dgv**（ドイツ民俗学会）：“Deutsche Gesellschaft für Volkskunde” の略号。

50）**ペーター・ヴァインガルト**（Peter Weingart 1941–L）：ヘッセン州マールブルク生れ。フライブルク大学とベルリン自由大学で社会学・経済学・経営学を学び、アメリカのプリンストン大学へ一年留学した後、ベルリン自由大学において社会学で学位を得た。学位論文は「アメリカの知識ロビー：研究計画の策定に見る学問システムの社会的・政治的変遷」で、以後も知識社会学の構築にたずさわり、1973年からビーレフェルト大学教授として活動した。

51）**DAAD**（Deutscher Akademischer Austauschdienst ドイツ学術交流会）：ドイツ政府による自国文化の国際化のための機関で、世界各国からドイツの大学への公費留学生を受け入れている。日本に対しては毎年20人の規模で行なわれてきた、ドイツ語学・文学の他、自然科学や音楽・演劇などの研究者も含まれる。この他、ドイツ文化の世界への弘付のためのさまざまな事業をおこなっている。

52）**東ドイツのエスノグラフィー……文化と生活様式**（Lebensstil）：東ドイツではマルクス主義の唯物史観を背景にした、生産力と生産関係に規定されたものとして〈生活様式〉という用語がキイワードになっていたことが、この発言では踏まえられている。

53）**科学アカデミー**（Akademie der Wissenschaften）：東ドイツの代表的な学術支援組織で1946年7月1日に占領していたソ連の指導でプロイセン科学アカデミーを改組してドイツ科学アカデミー（Deutsche Akademie der Wissenschaften）が設立され、後に1972年にドイツ民主共和国科学アカデミー（Akademie der Wissenschaften der DDR）となった。東ドイツの消滅後、ブランデンブルク州と協定が結ばれて1992年に「ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー」（Berllin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften）となった。翌1993年にはそれに賛同しない約60人がライプニッツ研究所を設立した。

54）**『民俗学会誌』**（Zeitschrift für Volkskunde）：ドイツ民俗学会の機関誌。1891年にベルリン大学のゲルマニスティク教授カール・ヴァインホルト（Karl Weinhold 1823–1901後にベルリン大学学長）によって1891年に『民俗学（組合）誌』（Zeitschrift des Vereins für Volkskunde）が刊行され、その第二次世界大戦後、その後進として本誌が現在のドイツ民俗学会の機関誌として編まれている。

55）**ヴォルフガング・ヤコバイト**（Wolfgang Jacobeit 1921–L）：ベルリン大学民俗学科教授。東ドイツを代表する民衆史研究家。

56）**クリステル・ケーレ=ヘーツィンガー**（Christel Köhle-Hezinger 1945–L）：テュービンゲン大学でヘルマン・バウジンガーに就いて民俗学を学び、東西ドイツの統一後、イェナ大学教授となった。

57）**ウーテ・モールマン**（Ute Mohrmann 1938–L）：ゲーラ（Gera テューリンゲン州）に生れたエスノグラーフ、東ドイツ時代のベルリン大学の民俗学科では最後の教授、東独の崩壊後、キール大学教授となった。

58）**ディーター・シュトリュッツェル**（Dieter Strützel 1935–99）：東ドイツの文化評論家。デッサウ（Dessau）に生れ、ライプツィヒのカール・マルクス大学でゲルマニスティクと英米文学を学んで、1967年に学位を得た後、出版社の編集長などを歴任し、かたわら大学にも出講した。

59）**ヴォルフガング・ヘルツベルク**（Wolfgang Herzberg 1944–L）：ジャーナリスト・作家。イギリスのレスターでドイツ系ユダヤ人亡命者の子供として生まれた。1947年から旧東ドイツのベルリンで成長し、ベルリン大学で文化研究を専攻した。東ドイツで記録映画やテレビ番組の制作助手を経て、1980年からフリーの作家活動に入った。ロックバンドへの作詞も手がけ、ヒット作品もみられる。

60）**マックス・プランク研究所**（Max-Planck Institut ＝ MPI）：マックス・プランク学術振興会が運営するドイツ政府と諸州による多彩な学術研究所群。有名な物理学者の名前を冠している。

61）**青色リスト研究所**（Blaue-Liste-Institut）：「東ドイツ科学アカデミー」（注53）のニックネーム。

62）**地域振興・構造計画インスティトゥート**（IRS ＝ Institut für Regionalentwicklung und Strukturplanung）：日本の「㈶地域活性化センター」と似たような機関と見ると分かりやすい。

63）**WIP**（＝ Wissenschaftler-Integrations-Programm 学術研究者統合プログラム）：1992年から1996年にかけて、旧東ドイツ地域で行なわれた研究者を西ドイツの基準に編入するための支援事業。

64）**生活世界の……モビリティ**（Mobilität von Lebenswelten）：モビリティは一般に流動化を図ること、また流動化が起きること。社会的モビリティに限れば、たとえば階層や職業選択や教育における硬直した仕切りや制約を低くして、異なった部門間での行き来を促進することを指す。たとえば社会人や障害を抱える人々への教育の機会の拡大、また地域に限定されずに交通や物流を促進することなどを指す。グロバリゼーションなどと共に現代の流行語である。

65）**生活世界への専門知識導入**（Verwissenschftlichung von Lebenswelten）：教育学の用語で、広く社会を日常生活の水準にとどめるのではなく、幾つかの分野については専門的、特に学術的に整理された知識や知識習得の姿勢を定着させる施策を指す。1970年代からドイツの社会教育政策のキイワードとなっているが、哲学者ハーバーマスなどは批判的である。

66）**居合せ**（Kopräsenz）：本来、美学・演劇用語で、有機的につながっていない複数の配役が同じ舞台上に現れること、また拡大した意味では演者と観客という異なる立場の者が一場に共にいることを指す。絵画でも、明らかに別の関心をもつ思われる複数の人物が同じ画面に描かれていることを言う。そこから、多文化社会では、利害関心の異なる者が同時に同じ平面に居合わせる意味でもちいられる。日常語ではなく、外来語起源のやや特殊な用語であるためにアクセントが感じられる。

解　説

本稿は、2001年にベルリン大学の民俗学科に相当するヨーロッパ・エスノロジー学科の教員・研究者組織「ヨーロッパ・エスノロジー研究所」で行なわれた座談会の翻訳である。その記録は、同研究所の定期誌『ベルリン通信：エスノグラフィー=エスノロジー』に掲載された。直訳すると「ヨーロッパ・エスノロジーのパースペクティヴ：(座談者) ヴォルフガング・カシューバ／ペーター・ニーダーミュラー／ベルント＝ユルゲン・ヴァルネッケン／ギーゼラ・ヴェルツ　(司会) シュテファン・ベック／レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ」となる。なおはじめに掲げた「ベルリン・ディスカッション」は略称で、掲載誌では柱に使われている。翻訳にあたっては、内容を分かりやすくするために解説的なタイトルとした。書誌データは次である。

Berliner Diskussion : Perspektiven Europäischer Ethnologie — Versuch einer Zwischenbilanz. Gespräch zwischen Wolfgang Kaschuba, Peter Niedermüller, Bernd Jürgen Warneken und Gisela Welz. Programmdirektoren: Stefan Beck und Leonore Scholze-Irrlitz. In: Berliner Blätter / Ethnographische und ethnologische Beiträge, Jg.23 (2001), S.167–190.

次に、座談会の参加者の略歴を挙げる。

座談者のプロフィール

(司会) **レオノーレ・ショルツェ=イールリッツ**：1963年生まれ、東ドイツ時代のベルリン（フムボルト）大学でフォルクスクンデ（民俗学）・フェルカークンデ（民族学）と歴史学を学び、1991年から94までブランデンブルク州ベースコフの地域資料館（Reiginalmuseum Burg Beeskow）の館長を務め、1995年かにベルリン（フムボルト）大学のヨーロッパ・エスノロジー研究所に付属するベルリン=ブランデンブルク調査室の研究員となり、現在は就任研究員である。カシューバとの共編著が多く、座談会に先立つ者では次の成果をまとめている。*Alltagskultur im Umbruch*, hrsg. von Wolfgang Kaschuba, Thomas Scholze, Leonore Scholze-Irrlitz 1996.

(司会) **シュテファン・ベック**：1960年生まれ、シュトゥットガルト大学で行政学、次いでテュービンゲン大学で国民経済学・比較宗教学・近代史・経験型文化研究を学んだ。1997年から98年の冬学期にダルムシュタット工科大学において大学卒業資格取得講義「科学技術化と社会」の企画に参加した。1998年にベルリン（フムボルト）大学のヨーロッパ・エスノロジー研究所の研究員となり、その後、同研究所の教授となった。主著に『科学技術との付き合い』(*Umgang mit Technik : Kulturelle Praxen und kulturwissenschaftliche*

Forschungskonzepte. 1997）があり、ヘルマン・バウジンガーの『科学技術世界のなかの民俗文化』以来、久しぶりにそのテーマの再考が試みられたことでも注目されてきた。

ヴォルフガング・カシューバ：1950年生まれ（バーデン=ヴュルテムベルク州のゲッピンゲン）、テュービンゲン大学へ進み、はじめ政治学とアングロサクソン学を学び、次いでヘルマン・バウジンガーに就いて経験型文化研究を専攻した。学位と教授資格を得てテュービンゲン大学の経験型文化研究を担当するルートヴィヒ・ウーラント研究所の教授となり、1992年にベルリン（フムボルト）大学教授となってヨーロッパ・エスノロジー学科を主宰している。この方面では特に次の指針的な著作がある。*Einführung in die europäische Ethnologie.* 1999.；またウーテ・モールマンと共に東西ドイツの統一直後の市民レベルの実態と問題性の把握に向けて次の共同研究をまとめた。*Blick-Wechsel Ost-West: Beobachtungen zur Alltagskultur in Ost- und Westdeutschland*, von Wolfgang Kaschuba und Ute Mohrmann. 1992.

ペーター・ニーダーミュラー：1952年生まれ。ハンガリーのデブレツェンにおいてフォルクスクンデ、歴史学、言語学を学んだ。1992年にハンガリーのペーチ大学でコミュニケーション研究講座を主宰となった。1996年以来ベルリン（フムボルト）大学ヨーロッパ・エスノロジー学科の教授の位置にある。座談会の頃に次の編著をまとめている。*Europe: cultural construction and reality*, edited by Peter Niedermüller. 2001.

ベルント＝ユルゲン・ヴァルネッケン：1945年生まれ。テュービンゲンでゲルマニスティク、歴史学、哲学、一般修辞学を学んだ。1975年に博士学位、1983年に教授資格を得て、学術主任となり、次いでテュービンゲン大学の経験型文化研究を担当するルートヴィヒ・ウーラント研究所の教授となった。同研究所による数多くの共同研究のリード役であった。数例を挙げると、例えば民衆のデモ行動の歴史に関する次の共同研究を指導した。*Als die Deutschen demonstrieren lernten : das Kulturmuster "friedliche Straßendemonstration" im preußischen Wahlrechtskampf 1908–1910 : Begleitband zur Ausstellung im Haspelturm des Tübinger Schlosses vom 24. Januar bis 9. März 1986* [Projektgruppe: Joachim Albrecht u.a.; Leitung: Bernd Jürgen Warneken] Tübingen 1986.; また東西ドイツの交流と摩擦をめぐる次の共同研究を指導した。*Spiegelbilder : Was Ost- und Westdeutsche übereinander erzählen*, [Projektgruppe, Anke Adametz-Leichtle ; Leitung, Bernd Jürgen Warneken; Redaktion, Elisabeth Eicher u.a.] 1995. ドイツに暮らすトルコ人とドイツ人の諸関係について共同調査を指導した次の成果もある。*Dazu gehören zwei : über Sozialbeziehungen zwischen Deutschlandtürken und Deutschen; ein ethnographisches Studienprojekt*, Ludwig-Uhland-Institut für Empirische Kulturwissenschaft der Universität Tübingen [Projektmitglieder: Jasmin Becker u.a. Projektleitung: Bernd Jürgen Warneken]. 2006.

ギーゼラ・ヴェルツ：1960年生まれ。フランクフルト大学において文化人類学とヨーロッ

パ・エスノロジーをその分野の主任教授で代表的な女性研究者であるイーナ=マリーア・グレヴェルスに就いて学んだ。1985年から1989年までフランフルト大学の文化人類学・ヨーロッパ・エスノロジー研究所の学術研究員の後、1989年から96年までテュービンゲン大学の経験型文化研究を担当するルートヴィヒ・ウーラント研究所の学術助手となり、1998年にフランフルト大学の文化人類学・ヨーロッパ・エスノロジー研究所の教授となった。研究領域では、主な学業地であるフランクフルトが外国人比率が高いなどの特色をもつことへの関心を強め、早くから多文化社会研究に取り組み、主要な業績もそのテーマにかかわっている。

Inszenierungen kultureller Vielfalt. 1996.；またフランクフルト市の多文化社会の調査研究を指導して次の成果をまとめている。*Weltstadt Frankfurt am Main? : multikulturelle Politik, Modell Mainmetropole, Büros gegen Wohnungen / Projektgruppe des Ludwig-Uhland-Instituts für Empirische Kulturwissenschaft.* [Projektleiterin: Gisela Welz] 1992.

座談会の特徴

この座談会の企画にあたってのオフィシャルな機縁は、東ドイツ時代に永くベルリン大学の民俗学科（フォルクスクンデ／エスノロジー）の主任教授であり東独を代表する民衆文化研究家であるヴォルフガング・ヤコバイト（訳注55）の80歳の祝賀であった。これ自体、ドイツ民俗学の分野では東西ドイツ間で一定の交流と相互理解があったことを示しているが、それはともあれ本稿を訳したのは世界的にも民俗学が変質をきたすなか、この分野に厚い伝統をもち、また幾つかの改革志向によって世界の民俗研究をリードしてきたとも言えるドイツ民俗学界の直近の問題意識を見ようとしたのである。直接のテーマはベルリン大学の民俗学科にあたる部所で企画された回顧と展望であるが、ドイツの中心的な大学の一つでもあり、そこでの議論はかなり一般的な性格をも見せている。それには、その座談のモチベーションがヨーロッパ・エスノロジーを掲げる学科とその教員・研究組織ということもあろう。ヨーロッパ・エスノロジーは、今日のドイツでは民俗学にあたる分野を指す名称としては最も一般的である。細かく見れば、フォルクスクンデとヨーロッパ・エスノロジーが同じであり得るか、連続性の如何は、といった疑問をふくみ、それも座談でふれられてはいるが、それこそ民俗研究者が学術的に結集する旗印でもあるので、他国の民俗研究者も関心をそそられるのではあるまいか。とまれ、できるだけアプ・ツ・デイトな外国の事情を、できれば生（なま）の形で伝えたいという試みの一つとして取りあげた。

中身については、座談であるので、読み流せばただちに分かることであるが、参考までに以下に項目を拾う程度ながら解説をほどこす。

ドイツに特有の問題　1：時事性（東西ドイツの再統一など）

座談における話題の推移では、（ドイツ人にはからみあってはいるが）外部から見る場合、二面性をもつことを念頭においておくのがよいであろう。一面は、民俗研究の一般的な問題性、言い換えれば日本や東アジアの民俗研究者も避けては通れない現時点ないしは近い将来の普遍的な諸々の課題である。二つ目は、ドイツ民俗学界に特有の課題や話題である。

後者にはまた、ドイツ人にとっても時事的な性格のため、座談会からさらに十数年を経た今日では深刻味が薄れてきている種類も含まれている。その最大のものは、東西ドイツの統一、実態を踏まえれば西ドイツによる東ドイツの併合であろう。すなわち、各分野において東ドイツの伝統がほとんど否定され、西ドイツの人員が要所々々を埋めたのである。中央官庁の人事では、公務員の高級・中堅幹部はほとんど全員が入れ替えられた。大学でも、ベルリン大学をはじめほとんどの大学において社会科学系の法学部や経済学の場合、ごく少数を除いて教授陣はほとんど総入れ替えとなった。人文系ではそこまで極端では無かったが趨勢は変わらなかった。ただ民俗学では、東ドイツの中心メンバーには西ドイツの学界と交流をもつ人たちが少なからずおり、断絶というところまでは進まなかった。ベルリン大学民俗学科の主任教授であったウーテ・モールマン女史がしばらく地位にとどまって、西ドイツから赴任したヴォルフガング・カシューバと共に新たに改組したヨーロッパ・エスノロジー学科の運営にたずさわった後、キール大学へ移ったのは、ソフトな交替のシンボル的な動きでもあったろう。

しかし、東ドイツ科学アカデミーの解体・再編などの大きな枠組みの変化などの影響は不可避的に影響した。また東ドイツの民俗学が培ってきた研究の伝統を直接的に継続させることもなくなった。〈マルクス・レーニン主義の民俗学〉という看板だけでなく、個々の領域の研究テーマの立て方や継続性にも影響した。また東ドイツ時代におこなわれた研究の成果をどう評価するかという課題もそこには重なった。ちなみに、東ドイツ時代には、民謡研究では民衆の権力への抵抗の証しとしてある種の歌謡を系統づける作業がなされ、また（この座談会でも何度か言及される）マグデブルク沃野の研究は、同地域の農業経営の変遷を資本主義の浸透による民衆の経済状態の変化という角度からの総合調査であった。

これらが何度も言及されるのは、ドイツに特有の条件であり、またドイツでも東西ドイツの統一の余波がなお生々しく感じられた21世紀初頭に特徴的な様相であったろう。それ以来十数年を経た現在では、これらの諸問題に関する限り切迫感は失われつつあろう。それゆえ、この側面は割り引いて座談を追ってゆく方が分かりやすい。

ドイツ民俗学界に特有の問題 2：学問名称（フォルクスクンデ）の当否

今日のドイツ語圏では、民俗学は、伝統的なフォルクスクンデ（Volkskunde）が正面に据えられることは少なくなっている。それに代わって多いのは、〈ヨーロッパ・エスノロジー〉あるいは〈ヨーロッパ・エスノロジー／フォルクスクンデ〉という二重名称である。早かったのは、マールブルク大学、ついでフランクフルト大学とミュンヒェン大学、そしてベルリン大学であり、また今日ではオーストリアのインスブルック大学のような地域史研究に伝統をもつところまでが〈ヨーロッパ・エスノロジー／地域史研究〉となっているほどである。

こうした名称変更が起きたのは1970年頃からであった。これにはフォルクスクンデというドイツ語が特殊な色合いを引きずっていることが大きくかかわっていた。フォルクスクンデは、ドイツでは日本の〈民俗学〉のような学術分野を専ら指す言葉ではなく、もっと一般的で、語の歴史も古い。ちなみにゲーテはフォルクスクンデを昔話の意味でもちいたことがあった。しかし何よりも問題とされたのは、フォルクスクンデがナチズムとの関わりで使われたマイナスの過去であった。それには民俗研究者も少なからずかかわっているが、それと並行して学問分野の繋がりでも人脈的にも民俗学とは別の系統の人たちもフォルクスクンデを名乗っていた。つまりフォルクスクンデは一般語であった。のみならず、民俗学にも幾分の責任がありはするが、古めかしい語感を漂わせている。日本語に直訳できるわけではないが、敢えて感触を伝えるなら、〈民の覚え〉とか〈民の知るべ〉といったところかも知れない。それゆえ、そうした問題性をかかえてはいない日本において、ドイツの顰にならって名称変更をめざすという限りではあまり意味がないことにもなる。

民俗研究に一般的な諸問題

次に座談における、より一般的な内容である。これは項目を挙げる程度にとどめるが、それでも多少の目安にはなろう。

(1)　ヨーロッパ・エスノロジーがフォルクスクンデ（民俗学）の後進であるのかどうか、またどの程度までそうであるのか、さらにそれにどう対処するのかという問題。フォルクスクンデが大学に位置を占めるようになるのは、20世紀の20年代以降、むしろ30年代にナチス・ドイツの政策の一環として推進された面がある。数例を挙げると、テュービンゲン大学の民俗学科とその研究者組織であるルートヴィヒ・ウーラント研究所やゲッティンゲン大学の民俗学科、またボン大学やハイデルベルク大学のゲルマニスティクの枠での民俗学講座の増設などである。それどころかベルリン大学の民俗学科が誕生した経緯も同じ政策の下においてであった。そうした負の歴史を直視することは第二次世界大戦まもなくから追求され、それが方法論の改革につながった面が

ある。しかしこの座談会で主要に問題視されるのは、民俗学が研究対象を伝統文化にほぼ限定していることの当否、したがってイデオロギーや価値観を横切る次元での一般的な特質についてある。

⑵ 民俗研究ないしはその後進としてのヨーロッパ・エスノロジーが人文科学か社会科学という議論。ちなみに、ドイツ民俗学が本格的に形成されたロマン派思潮のなかでは、主要にはゲルマニスティク（ドイツ語学・文学研究）すなわち国文學の一部門であった。並行して、物質文化研究の蓄積も決して小さくはなかったが、方法論から見て独立性を持つようになるのは、大ざっぱに言えば1960年代からであった。それに対して、民俗学を社会科学に接近させるべきとの問題意識も、その頃から台頭した。ヘルマン・バウジンガーにもその姿勢があり、またマールブルク大学の民俗学科を主宰したインゲボルク・ヴェーバー=ケラーマンやフランクフルト大学を主宰したイーナ=マリーア・グレヴェルスもそれを追求してきた。また人文科学か社会科学か、という区分は、特に社会的現実を対象とした場合、解釈に終始するのか、社会的な提言まで進む姿勢を併せもつのか、という選択につながる。ちなみに、ヴォルフガング・カシューバやギーゼラ・ヴェルツは後者を強く課題としている。またこの座談の外にも目配りするなら、ミュンヒェン大学教授イレーネ・ゲッツも、特にドイツ人とドイツ在住の外国人・異文化出身者問題を社会科学の視点から追及している。

⑶ 隣接する諸学を前にしたときのヨーロッパ・エスノロジーの独自性ないしは専門分野としてのアイデンティティ。特にここでは、文化人類学、社会学、歴史学との関わりに強い問題意識がみとめられる。（日本でも知られている人名では）文化人類学のクリフォード・ギアツや歴史学のユルゲン・コッカの名前が挙げられ、それらに対するヨーロッパ・エスノロジー研究の特質の自問は、座談者の共通課題となっている。またここでは触れられないが、ドイツ民俗学界の他の場面では、社会学のピエール・ブルデューやウルリッヒ・ベックやゲルハルト・シュルツェの理論に対する民俗研究の独自性を問題にする議論も見受けられる。さらにカシューバの『ヨーロッパ・エスノロジー入門』では、踏まえておくべき自己分野の学史・学説に加えて隣接学の成果の概観・位置づけが試みられ、そこでは文化人類学のカルロ・ギンズブルクや歴史学のジョルジュ・デュビイなども取り上げられている。広く見れば、学界状況のそうした問題意識がここでも現れているのである。総じて、民俗研究の関係者が、その思い定めた縄張りで自足せず、方法論的にも対象設定の面でも隣接の諸学との関係において自己を客観視し、また特定しようとする姿勢をとっていることは、日本の実情と比較すると参考になりそうである。ちなみにカシューバの上記の概説書の中国語訳がまもなく刊行されるのも、国際的な動向を反映しているであろう。

⑷ ヨーロッパ・エスノロジーという学問名称の名実の乖離。今日では民俗研究の学術機

関の多くがヨーロッパ・エスノロジーを掲げてはいるが、実際の中身はドイツ語圏の民俗事象や日常事象がほとんどで、ドイツ語圏以外の国、スペインやポーランドの事情に等分に目配りされたり論じられたりしているわけではない。この問題は、座談でもふれられてはいる。またここには現れない他の論者、たとえばミュンヒェン大学のクラウス・ロート教授などがその専門とする民俗学を背景とした国際コミュニケーション研究の視点から批判してもいる。

(5) ヨーロッパ・エスノロジーの名称の下に、なお全面的ではないが、ＥＵを射程においた研究姿勢が問われている。その際、たとえばドイツ・エスノロジーとフランス・エスノロジーを合わせればよいと言うのではなく、ＥＵ全体をいかなる視点で射程に置くのかと質している。これは、東アジアを射程においた民俗研究にも刺激となるところがあろう。

(6) ここでは、今後の研究課題として、民俗研究の延長線上とは言っても、歴史的研究ではなく、主に現代の日常文化を座談者たちは念頭においている。たとえばヴォルフガング・カシューバは、学位論文や教授資格論文では19世紀の三月革命前後の農村事情と都市民の動向をテーマにしていた。またそうした歴史的な課題の場合、鮮やかな切り口を見せてもいる。それに対して、民俗研究が現代の日常文化や世相となると、どこに視点を定めるかを含めて、土台から考えて直さなくてはならない。またそれが文化人類学や社会学にたいする民俗研究あるいはヨーロッパ・エスノロジーの独自性ないしは学問的アイデンティティにも重なる。

(7) ヨーロッパ・エスノロジー／民俗学の規模と課題。ドイツ語圏の３カ国を併せて教授ポストが40という数字が挙げられているなど、比較的小さな専門分野であるが、その小ささを嘆きつつも、独自性ないしは存在意義は何かを問うている。

(8) ポスト・モダン。座談では正面から扱われていず、むしろ前提となっているのは、ポスト・モダンの時代状況における日常研究のあり方である。モダンとは近代化で、それは図式的に言えば工業化や近代国家の成熟を意味する。近代化や工業化のなかで出現した文化的現象や、さらに社会的な様相については、ドイツ民俗学はともかく取り組んできた経緯があり、指標的な研究の蓄積も見られる。この座談会の参加者たちがそれらを完全に消化しているかどうかという疑問も起きないではないが、ドイツ民俗学界がポスト・モダンを課題としていることがここにも反映している。

なお付言すると、この座談に過大な期待を寄せると、あまり報われないかも知れない。上に挙げた諸問題についても、座談を通じて明快な解答や見通しが立てられるわけではない。それは、座談という表出形式の一般的な制約にして、また特色でもある。座談はその参加者が日頃の持論を持ち寄ること自体が基本のことが多く、それらが一堂で突き合わせ

られるという面白さはあるものの、会話のやりとりを通じて深まってゆくことは案外少ない。それゆえ各自の立場の表明がいったん出そろうと基本的な視点自体は堂々巡りになることが避けられないが、同時に思いがけない話題がからんでくるために、見落としが無くなる利点もある。ともあれ、座談参加者が一致して結論を出すことを期待するのは、読み方としては当たらない。むしろ最大の注目点は、関係者が何を問題や課題として意識しているかであろう。

これにちなんで語学的なコメントを加えると、座談会の記録は、整った書記文と会話文の中間的な性格をもっている。したがってメリハリなくずらずらと続くところがあるが、その反面、参加者はそれぞれにキイワードや殺し文句を用意しており、発話者たちのストラテジーが重層している。チャンスを見て投入される話題や術語には、自己分野の学史上のエポックに加えて、隣接学の基本概念やインパクトをもつ流行語に手が伸びていることもあり、それらが要所々々で響きわたる。それゆえ言葉の流れに段差があり、座談がその形式上深みを欠くのを補って余りある（かどうかはともかく）面白味となっている。〈ポスト・モダン〉や〈モビリティ〉のような共通概念はともかく、〈ディスクール分析〉（フーコー）や〈厚い記述〉（ライル／ギアツ）や〈メソッドのミックス〉（デンジン）や〈節度〉（ルーマン）など隣接学に起源をもつ術語が幾分装飾音的に聞く者の耳をとらえる。演劇用語から一般語へ延びてきた〈居合わせ〉という多文化社会を念頭においた流行語などは、座談のはじめに使われていたなら、それを刺激に話題が広がっていたかもしれない。いずれも術語自体の掘り下げがなされるわけではないが、現代では分野を問わず飛び交っている符牒か約束事のようなものでもあり、またこの座談者たちもそれに特化すれば論じるだけの準備はあるであろう。

理解に要すると思われる共有知識のためには、あえてくどいほど訳注をほどこした。とまれ、この外国の民俗研究者たちの座談、読み手の側の問題意識や、対応する自己の学界事情と突き合わせて読んでもらえればと願っている。

最後に、本稿の翻訳にあたっては旧知のヴォルフガング・カシューバ教授をはじめ関係者から好意的な配慮を得たことを付記する。

30. Nov. 2012　S. K.